1991年1月5日発行（毎月1回5日発行）1984年2月10日第三種郵便物認可 ISSN 0286-4479

POLAND MONTHLY ／ BIULETYN POLSKI

ポーランド月報

1991年
1/2月号
（通巻106/107号）
500円

民主主義を破壊するカリスマ的指導者　アダム・ミフニク

共産主義者のいない共産主義　テレサ・ボグツカ

rys. Jacek Frankowski

「ベルヴェデーレへやってくれ」と言うワレサ、ベルヴェデーレ宮殿は大統領官邸。ワレサの持っている影像は第2次大戦前の英雄にして独裁者のピウスツキ元帥。

☆☆　ポーランド月報　1991年1／2月号（通巻106/107号）　目次　☆☆

大統領選挙（第1回投票）の結果について……3

レフ・ワレサ／タデウシュ・マゾヴィエツキ

民主主義を破壊するカリスマ的指導者……5

なぜ私はレフ・ワレサに投票しないか　アダム・ミフニク

なぜ私はワレサを選ぶか――知識人主導を懸念する……14

ステファン・キシェレフスキ

ポーランド経済：制約と機会　ツェザリ・ユゼフィアク……16

共産主義者のいない共産主義　テレサ・ボグツカ……22

社会主義はどこに？　ポーランド・グダンスクを訪れて　清水　正徳……28

ポーランド日誌　1990年10月18日～11月8日……2/31

ポーランド日誌

1990年10月18日～11月8日

10月18日　労働省スポークスマンによれば、失業者は97万4,000人に。●国営ＰＡＰ通信、1970年12月事件での労働者殺傷に関する調査開始を伝える。

10月19日　ニエザビトフスカ政府報道官、記者会見でソ連軍のポーランドからの撤退に関する両国間交渉が今年11月からと決まり、またスターリン時代のソ連公文書をポーランドが閲覧できるようになったと語る。

10月22日　マゾヴィエツキ首相、ワレサ委員長とのテレビ討論を「有益なこと」と受諾。●世論調査センターＣＢＯＳの調査結果によれば、回答者の62%が、ポーランドの経済危機対処策として民営化は必要だが十分ではないと答え、民営化は必要ない（14.9%）、民営化は必要にして十分（12.1%）とする考え方を大きく引き離した。民営化実施のテンポについては、遅すぎる＝46.1%、これで良い＝32.5%、速すぎる＝12.4%という結果。

10月23日　ワレサ委員長、50万人以上の署名を付して大統領選立候補届けを選挙管理委員会に提出。●内閣、鉱山労働者「連帯」全国委員会及び市内交通・港湾労働者「連帯」からの賃上げ要求を検討。関係諸大臣は早急に組合に回答を示し、受け入れ可能な要求に関しては交渉に入るよう指示される。●世界銀行の事務所がワルシャワにオープン。世銀副総裁はマゾヴィエツキ首相、バルツェロヴィチ蔵相らと会談し、ポーランドはあらゆる困難をおして現行の改革を続けるべきであると語る。●鉄道員組合メンバー約150人がワルシャワ中央駅で15分間のピケの後、国営鉄道理事会へ移って集会。午後にはクーロン労相と会う。●ポピエウシコ神父殺害実行犯として1985年に15年の刑を宣告されたレシェク・ペンカラが、２度の恩赦による減刑の結果、先頃釈放されたことが明らかに。

10月24日　選挙管理委員会、前日提出のワレサの立候補届けを正式に受理。●市民議会クラブ（ＯＫＰ）、今後の役割機能を討議。ＯＫＰ内部では農業政策や大統領選をめぐって意見の相違があり、解散も提案されたが、結局現在の形を維持することに決定。●ヤルゼルスキ大統領、国有地を外国資本に売却する可能性に触れた条項に反対して土地運用・不動産収用法案への署名を拒否、就任以来初めて下院採択法案に拒否権を行使する。

10月25日　選挙管理委員会、大統領選立候補登録を締め切り、次の６人の立候補を認める。タデウシュ・マゾヴィエツキ、レフ・ワレサ、ロマン・バルトシチェ（ポーランド農民党）、ヴウォジミエシ・チモシェヴィ

【31頁へ続く】

大統領選挙（第１回投票）の結果について

レフ・ワレサ／タデウシュ・マゾヴィエツキ

Election Results, Lech Wałęsa／Tadeusz Mazowiecki
Gazeta International, Issue40, Dec.6th 1990

【編集部注】11月25日、ポーランドの大統領選挙の第１回投票が行われた。2,754万5,625人の有権者のうち1670万2,000人が投票し、有効投票数は1,644万2,474票だった。投票率は60.6%になる。６人の候補者の得票数と得票率は以下のとおりである。

レフ・ワレサ＝「連帯」委員長……6,569,889票（39.96%）
スタニスワフ・ティミンスキ＝カナダ在住の実業家……3,797,605票（23.10%）
タデウシュ・マゾヴィエツキ＝首相……2,973,264票（18.08%）
ヴオジミエシュ・チモシェヴィチ＝旧共産党……1,514,024票（9.21%）
ロマン・バルトシチェ＝農民党……1,176,175票（7.15%）
レシェク・モチュルスキ＝ポーランド独立連盟……411,515票（2.50%）

上位２候補による決戦投票は12月９日に実施され、上位得票者が当選となる。

われわれは時代の要求に答え得たか

レフ・ワレサ

〔11月27日の記者会見から〕

ポーランド民主主義の驚くべき教訓に意気阻喪することがないよう望む。票を投じて私を助けてくれた人々は、われわれがすべてポーランドに対する義務を遂行しているということを知っているはずだ。私も有権者もこれを特別に楽しい仕事だとは思わないであろう。われわれは、この国をより良いものにするためにあらゆることをする。私に、あるいはこの目標に立ち向かう他の人に、寛容を期待してはならない。

われわれ１人ひとりがより良い生活とより多くの物を望んでいる。これは実現されなければならない。選挙戦の全期間を通じてわたしはこのことを繰り返し言ってきた。

……私は「連帯」を強化できると期待して選挙戦に臨んだ。ただし、改革運動としての「連帯」を。だが改革運動としての「連帯」は喘息の発作に襲われ、統制がきかなくなってしまった。すべてが勝手な方向に動きはじめた。政府は自分の方向に進み、市民議会クラブもそうだ。時代の要求にはいかなる回答も与えられなかった。

……ティミンスキがそんなに金持ならば、彼はポーランドの債務を買い取るべきだ。６カ月前私は、もしわれわれがわれわれの失敗を埋め合わせることができないならば、第３の勢力が現れ、われわれを皆殺しにすると警告した。この間、私はこうした失敗を埋め合わせるために最善を尽くし

ワレサ

Rys. Jacek Gawłowski

ギャンブル

てきた。そうでなかったとしたら、今の私の立場はもっと悪くなっていたであろう。

私はマゾヴィエツキ政府が無能だと言うつもりはない。しかしこの政府は国民と良好な関係を築けなかった。選挙の結果がこのことを証明している〔前日、ワレサ委員長は、マゾヴィエツキ内閣の総辞職のニュースを聞いて、テレビ・インタビューにこう答えていた。「彼らの選挙ポスターはすばらしかった。"平和の力"。……だが、この平和はどこへ行ってしまったのか？　もちろん彼らは遅かれ早かれ辞職しなければならない。だが、今日それを行うのは、無責任と無神経以外の何ものでもない。それは、民主主義をないがしろにするものであり、事態を悪化させるだけだ〕。

社会は選択を下した

タデウシュ・マゾヴィエツキ

〔11月26日の総辞職声明から〕

政府の運営を任せられたとき、私はポーランド社会の支持と理解を得ることが最も必要であると考えた。

経済的破局の回避を目的とした痛苦に満ちた、しかし避けて通れない計画の実施のためには、国民の大多数から理解を得ることが不可欠である。過去数カ月間、われわれは国民の理解を得ていると思ってきた。このことが私に活力を与え、政府は断固としてポーランドの変革に努力することができた。私は、この1年の間に多くのことが成し遂げられたと確信している。

選挙の結果は情勢が変化したことを証明した。この結果は、ポーランドの民主主義に関する、ポーランド経済の健全な基礎を築くための方法に関する基本的な考え方——私の内閣の仕事の基礎にあったものだ——に疑問を投げかけた。これは政治戦の数カ月がもたらしたものだ。この間に、ポーランド国民は実現不可能な約束を多く与えられた。多くの非難が、なかにはデマゴギーすれすれのものもあったが、政府と私個人に投げつけられた。

社会は選択を下した。そこから私は自ら結論を引き出し、その結果として閣僚諸君とともに首相職を辞任することに決めた。

しかしこのことは、政府の仕事の放棄を意味するものではない。新しい大統領によって新しい首相が任命されるまでの間、わが内閣はその憲法上の義務を履行しつづける。だが、新しい政府を拘束するような措置は一切とらない。

ポーランドが全体主義から離脱するこの困難な日々、私を支えてくれた人々すべてに、心から感謝の意を表する。　〔訳・水谷　驍〕

Rys. Jacek Gawłowski

マゾヴィエツキ

民主主義を破壊するカリスマ的指導者

なぜ私はレフ・ワレサに投票しないか

アダム・ミフニク

Dlaczego Nie Oddam Głosu Na Lecha Wałęsę, Adam Michnik
Gazeta Wyborcza nr. 251, 27 pazdziernika 1990r.

【編集部注】「連帯」顧問の１人として、1980～81年の合法期、戒厳令布告以降の非合法期、そして1989年春の円卓会議以降のマゾヴィエツキ「連帯」主導政権の成立過程で、陰に陽にワレサ指導部を支えてきた不屈の歴史家アダム・ミフニクが、今日では反ワレサの急先鋒に立つ。大統領選挙前の1990年10月に書かれた以下の論文は、反ワレサ派の政治運動、ＲＯＡＤに結集する「連帯」活動家および知識人の考え方を広く代弁すると言ってよい。なお文中の「連帯」ロゴマークをめぐる１件については、本紙1990年７月号を参照。

これは極めて個人的な考察である。

私がこれを公表するのは、それが何が起こったのか理解できずにいるすべての人々、この数カ月間に電話や手紙で不安や連帯の気持ちを伝えてくれたすべての人々に対する義務だと考えるからだ。

私の一番大きな感情は、当惑である。「連帯」内部の分裂は醜悪な出来事である。理念をめぐる公開討論のかわりに、シンボルをめぐる焦点をぼかしたあてこすりや言い争いが仕掛けられた。

「連帯」のロゴマークに関する争いは、もっと根本的な見解の相違のひとつの縮図であった――ポーランドの社会生活、政治文化の水準、将来の姿はどうあるべきかについての見解の相違の。問題なのは細部ではなく原則であった。それゆえ「連帯」の内部分裂は避けることができなかったのだ。それは「連帯」ロゴマーク使用権剥奪から始まって、ついには組合構造をレフ・ワレサの選挙運動機関に作り変えるところまで行きついた。苦々しく思わずにいる方が難しい。

Ｉ　ワレサ批判は許されない？

「連帯」ロゴマークは、この10年間「連帯」に忠実であった人々にとって、極めて大きな感情的価値を持つ、別れがたいものである。彼らはその文字を地下出版物に印刷し、街なかの壁に書きつけ、街頭デモでその言葉を叫んだ。街ではＺＯＭＯ〔警察機動隊〕が人々の「連帯」バッジをむしり取り、家の中には公安警察が押し入って「連帯」の文字の入ったものを押収していった。それでも人々はその文字に忠実であり、殴られても刑務所に入れられてもその言葉を捨てなかった。その文字は彼らにとって、より良いポーランド、民主・独立・公正のポーランドへの希望と信頼のしるしだったのだ。

そして今、そのロゴマークは「連帯」指導部内多数派の手で恐喝と検閲の道具に変えられてしまった。このロゴを紙名・誌名欄や発行者欄に載せている出版物は、今後、どんな内容の記事を書いてはいけないか知ることになろう。それゆえ、私の同僚編集者たちが『ガゼタ・ヴィボルチャ』のタイトルの下にあった「「連帯」なくして自由なし」のスローガンをはずす決定をしたとき、私はほっとした。なぜなら、自由と希望のシンボルを日和見主義とさるぐつわのシンボルに変えようとしている連中などに、私はみじんも連帯感など持たないから。

われわれの何が問題だったのか？　「連帯」全国委員会決定はそれを明確に述べている　われわれはレフ・ワレサを批判した、それが問題だったのだ。

その採決で賛成票を入れた人々すべてと個人的に知り合いなわけではないが、私は彼ら全員を心から哀れに思う。分別のない人間、了見の狭い

人間は、知らぬ間にそれを露呈してしまうものだ。こんな同盟軍と手を結んでベルヴェデーレ宮殿〔大統領官邸〕をめざすレフ・ワレサにおめでとうと言いたい。彼は自ら望んでその不幸を手に入れたのだから。

ワルシャワ製鉄所での選挙集会の際に、「現在あなたを批判している新聞は、〔あなたが大統領になったとき〕どうなるのか」との質問に答えて、ワレサはこう言った。「それらの新聞を繁栄させておけ。それから諸君がその後を引き継ぐことになろう」。後でワレサのスポークスマンがそれはこういう意味だと説明した。「そう、民主主義が後を引き継ぐことになろう。自由選挙を重ねるうちに新しい政治勢力が現われ、独自の出版物やメディアを必要とするようになる。彼らは自由に選択できる——新規に出版物を作るか、政治的敗北を喫した出版物を接収してわがものとするか」。

私は、ワレサやそのスポークスマンの口からかくも簡潔なボリシェヴィキ的思考の定義を聞くことになろうとは、思ってもいなかった。

II　たぐいまれな政治家、しかし…

私はこれまで常に、ワレサの政治的手腕を称賛してきた。私は戒厳令下の困難な時期における彼の戦略を真に尊敬していたし、私自身レフの協力者の1人として、不屈の闘いを続けながら現実的感覚も失わないその戦略を支持した。彼の政治は慎重でありながら大胆だった。そして何よりも有効であり、彼のたぐいまれな本能によってさらに効果を増した。

その後、私と彼の道は分かれた。われわれは今や、異なった視点を代表している。それでもなお、われわれは嫌味やあてこすりの応酬ではなく理念をめぐる論争ができると信じたい。昔日の友情があからさまな憎悪になるのは良くないことだ。

レフ・ワレサ。今日わが政治的対立相手であるこの男は、たぐいまれな政治家だ。対立相手に正当な尊敬を払わない人間は、自らへの尊敬もかちえることはできないと思う。

私はワレサを多くの点で好きだ。彼のユーモアのセンスが好きだし、彼の直観力や政治的な抜かりなさには称賛を送る。そして共産主義体制との闘いで彼がいかに大きな役割を果たしたかを私は理解している。だからこそ、独立自治労組「連帯」議長にしてノーベル平和賞受賞者である彼が、1度きりしかないポーランドのチャンスを無駄使いし、自身の良いイメージをぶち壊し、世界の中でのわが国のイメージにも傷をつけているのを見るのは悲しいことなのだ。ワレサがポーランド民主主義のシンボルから、ポーランド民主主義のグロテスクなカリカチュアへと次第に変わっていくのを見るのは胸が痛む。ワレサ批判を理由に『ガゼタ・ヴィボルチャ』から「連帯」ロゴマーク使用権を剥奪するとの決定は、この人々が国家権力を握ったときにポーランドの民主主義がどうなっていくのかを予示する、最初のしるしだった。それはまた、ワレサの民主主義観のあらわれでもある。

III　カリスマ的権力の本質

ワレサは大統領になることを望んでいる。私はそのこと自体は悪いと思わない。私が懸念するのは、彼が命令によって統治する「斧を持った大統

© Jerzy Szczęsny　　アダム・ミフニク

領」になりたがっており、民主主義を、自動車に対する運転手のコントロールになぞらえていることである。ワレサは言う、「今日、われわれが体制を変えつつあるこの時には、斧を持った大統領が必要だ。決然とした、鋭い、単純な、要点をずばりと言う大統領が」。この発言よりなお悪いのは、彼が「連帯」を自分の野望達成の道具として扱っていることであり、「私が要求している公開の義務投票になれば、私は80%の票を得て勝つだろう」といった発言をしていることであり、街頭暴動が起きるぞと脅かしていることであり、さらに自分自身のことばかり言って自分のプログラムを述べないことである。一言で言えば、ワレサがベルヴェデーレに行くためには手段を選ばないとということなのだ。

「連帯」議長としての彼は、この困難な時期に組合の活動のためのプログラムを何ら作成しなかった。この1年間、市場経済への移行期における組合の役割や活動方針はどうあるべきか、労働者の利益をいかにして守るか、失業にどう対処すべきかについて、ワレサは一言も口にしていない。

そのかわりわれわれは繰り返し、「連帯」は分裂しなければならないと聞かされてきた。そしてワレサ自らが「連帯」を分裂させた。彼は自分に反対する能力のある者、自分の行く手に立ちふさがりそうな者をすべて切り捨てた。そのために、それらの人々に公然と「インテリ」「ユダヤ人」のレッテルを貼る方法も有効と見て利用した。

私はレフ・ワレサの動機が理解できる。彼の野望はまだ満たされていない。彼は2度にわたり、政治的な高いポストに就くことをしなかった。彼は上下両院選挙に立候補せず、首相の座に就こうともしなかった。私の考えでは、彼はつねに、同一の動機、社会の中での自身の位置づけに従って行動してきた。ワレサの政治的理想は、「特殊例外的な地位」である。全能の権力を持ち、何の責任も負わなくてよい地位。彼は大統領の権能をこのように理解している　大統領が統治し、責任は首相や大臣やその他の人々が負う。この考えはべつに驚くにあたらない。ワレサはこれまでもつねにカリスマ的指導者であり、規約やプログラムを遵守したことはなく、民主主義的手続の何たるか

斧を持った大統領……？

を理解していないかのごとく振舞ってきた。1980年8月には、彼のその無視は正しかった。戒厳令下、ワレサはその種の手続を知る必要など自分にはないと認識した。おそらくはまさにそのおかげで、そのカリスマ性のゆえに、彼は戒厳令時代に優れた指導者であることができた。

では、カリスマ的権力の本質とは何か？　カリスマとは、他の人々の感情や情緒を動かせるということだ。指導者への感情的服従と、その傑出した能力や才能への尊敬は、指導者と普通の人間との間に特殊な関係を作り出す。普通の人間は、一種の信仰に基づく無条件の信頼を指導者に寄せ、彼に従うようになる。指導者はいかなる場合にもどうすればよいかをより良く知っている、と普通の人々は考える。指導者の権力には何らの制限も規制も加えられない。指導者の適性や能力は本質的に重要でなくなる。法律も重要性を失う。重要なのは偉大な指導者の　行きあたりばったりの——決定だけである。

カリスマ的指導者が登場するのは、政治舞台が破壊され空白が生じた状況、希望がないか、あるいは突如大きな希望が現われた状況下である。人

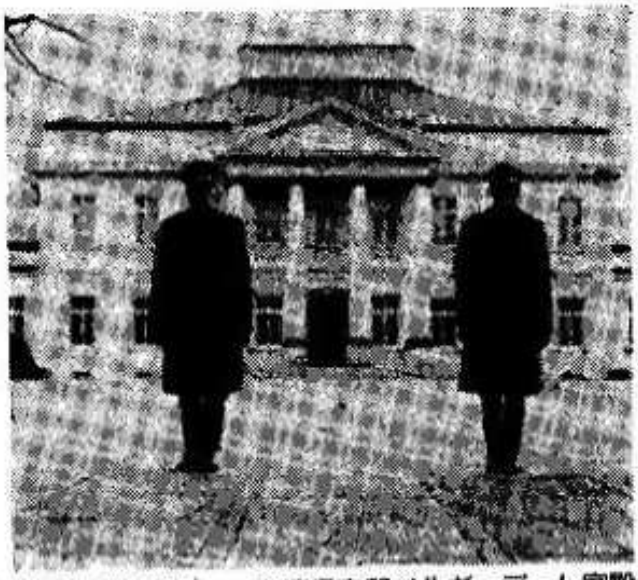
々の集団的夢と、新しい神話を待望する気持ちとが、カリスマ的人物を浮上させる。予言者でも、大衆指導者でも、街角のデマゴーグでもかまわない。その人物は、公正で決して敗北することのない指導者の神話を体現する。賛嘆と畏怖をまき起こす。

歴史上、極めて革命的な過程にはカリスマ的権威がつきものであった。なぜならカリスマは恐怖心や無気力を克服させ、旧来の伝統的秩序を破壊し、古い政府や君主や外国の占領支配を打破するのに力があるからだ。ところがひとたび勝利するや、このカリスマ的権威は全くの「支配する」権威、非民主主義的権威となり、人々の上にそびえ立つようになる。自由で尊厳ある生活を求める人々の希望から生まれ出ながら、新たな独裁へと向かうのだ。偉大な指導者の無謬性への信頼が、臣民の義務として押しつけられる。指導者とその一派は、その信仰を皆が自発的に行動で示すよう要求する。この行動を拒否することは、違反とされ犯罪とされついには国家への反逆とされる。

そのときからカリスマ的権威は光を失い始める。「神の恩寵」を受けた偉大なる指導者に、奇跡を起こす力がないことが明らかになる。しかし、時すでに遅し。指導者はカリスマを失っても、代わりに警察を握っている。仕事能力ではなくごきげんとりの才能で選ばれた指導者の取り巻き連中は、警察を使って自らの権力を守ろうとする。革命の歴史はつねにこのパターンを証明してきた——クロムウェルからレーニンを経てホメイニまで。

カリスマ的指導者の神話は、人々が彼の超自然的力への信仰を捨て、無条件服従をやめるとき、崩壊する。革命の歴史をひもとけば、この覚醒過程が早く起きれば起きるほど、国民が自由と安定した秩序を取り戻すチャンスも大きいことがわかる。

カリスマ的指導者は、一旦勝利を収めると、権力や人気に病的なまでに執着しはじめる。そしてまた、病的なまでに猜疑心が強くなり、あらゆるところに敵を見、あらゆるところに陰謀を感じる。競争者を蹴落とし、それと一緒に正常な民主主義メカニズムを蹴散らすため、彼は誰にでも何でも約束する。かれは政治的プログラムについて議論



fot. IGOR SNIECINSKI　大統領官邸ベルヴェデーレ宮殿

したがらない。彼自身がプログラムなのだ。彼は自分自身について、自分の功績、自分の天才的業績についてしか話さない。計画の話はほんの少しだけ、それもおおざっぱに述べるだけである。彼は加速化を約束する。じきに、誰にとっても良い世の中になると。

Ⅳ　民主的国家の大統領

レフ・ワレサは民主的ポーランド共和国の大統領にはならない。

彼は大統領一般投票に負けるかもしれない。自慢話に彩られた彼の一連の発言を聞けば、この独立自治労組「連帯」議長が提示しているものが、彼自身の存在と、数々の相矛盾する約束のほかに何もないことが容易にわかる。彼の約束する「ポーランドの貧困の公平な分担」と「民営化の加速」はどうすれば折り合いがつけられるのか。市場経済を進めながら、どのようにして失業を即座に一掃するのか。困窮者すべてに100万ズウォティを支給するという彼の約束を、どうして真面目に取ることができようか。

かつての盟友ワレサとミフニク

ワレサは大統領選に勝つかもしれない。しかしその場合も、彼は民主的ポーランド共和国の大統領とはならず、政治体制を不安定化させ、混乱を引き起こし、ポーランドを世界の中で孤立させる者となるだろう。ワレサはこう言っている。「私は、フランスやイタリアやアメリカの大統領のような、古典的な大統領概念の支持者ではない。私は違ったやり方でやる。皆をびっくりさせたい。私の思い描く大統領はワインや晩餐会に象徴される生活を送ったりしない。私のモデルの大統領は『さまよえるオランダ人』のように国中を回り、必要ならばどこへでも介入する。ワレサの出番が多すぎる程になろう。だから多くの人々が恐れているのだ」。

ワレサは、「国民の父親」のイメージの維持に成功すれば、大統領に当選するかもしれない。父親は酔っ払って妻を殴るかもしれないが、子供たちは父親に意見することも手を出すことも許されない。神話がポーランドの知性と心を麻痺させれば、ワレサは勝つだろう。民主主義は自分にとって政府の舵を握る道具として必要なのだと公言しているにもかかわらず、彼は勝つだろう。そして勝った後は、彼が命じるものごとだけが民主主義的なものと呼ばれることになろう。

ワレサは疑いなく功績をあげたし、疑いなく長所を持っている。彼は人々の感情を嗅ぎ取る優れた力を備え、政治的駆け引きにたけた政治家である。何百万という人が、共産主義の終焉に彼の名を結びつける。しかしこの傑出した政治家も、カリスマ的指導者の時代は終わったということに気づいていないように見える。今日、カリスマ性は何かを破壊する力しか持っていない。

ワレサの持つ特質は彼を組合員数百万の「連帯」指導者にするうえで力があったが、その同じ特質のゆえに彼は民主主義国家の大統領には不適格である。ワレサのすることは予見できない。ワレサは無責任だ。彼は自分の失敗から教訓を得ず、他人の苦言に耳を貸さない。彼には大統領としての能力がない。

ワレサの行動の予見不可能性は、全体主義との闘いにおいてはひとつの長所であった。しかし現代国家の民主主義的構造のなかでは、大きな災いとならざるを得ない。

無責任さは、反対派活動や地下活動の状況下で

の産物だ。国家に何も影響を及ぼさない者には、国家に対する責任はない。

ワレサは自分の誤りを学ぶことができない。なぜなら、自分が誤りを犯すことはないと固く信じているからである。

そして最後に、経済や国際問題に関する彼の意見の無内容さ加減は、聞く者をぞっとさせ、立ちつくさせる。ポーランド人だけではなく、彼の話を聞いた外国人をも。

レフはポーランドのみならず全世界の神話であった。アメリカの上下両院が「連帯」指導者ワレサに大喝采を浴びせた場面は、今も私の目に焼きついている。そこでの彼の演説は実に素晴らしく、ポーランドの自由への意志を語る見事な講演になっていた。しかるに彼は、ここ数カ月間の行動でその神話を崩壊させたのだ。

指導者それぞれの個人的な特質は、彼らの私的問題である。レフ・ワレサは常に自己中心的な特質を持っていたが、われわれは皆、それとうまく折り合ってやってきた。しかし今、状況は根本的に変化した。

ワレサは常に、彼自身にとって良いことはポーランドにとっても良いことだと考えてきた。私も長い間そう考えていた。また、実際にも彼の考えは正しかったのだろう。しかし今では違う。ワレサの大統領への野望が実現すれば、ポーランドには破滅的な結果がもたらされよう。彼のおかげで、ポーランドの公開討論にこれまでになく粗暴な言葉が使われるようになった。ワレサはこんなふうに言っているのだ。「これはスキャンダルだ！この政府は告発されることになろう。私は今ここでも言う。政府は文書を破棄し、共産主義者どもが安楽に暮らせるよう手助けし、ポーランドの財を盗み取った罪で起訴されるだろう。起訴されねばならないし、いずれ時が来ればそうされるだろう。なぜなら責任を果たせなかったからだ」。

この類の言葉は、欲求不満を持ち、個人的野心と権力欲にとらわれた人々を磁石のように引きつける。ワレサはすべての批判者に対して、優越感をちらつかせた横柄な口調で話す。ワレサは人々に「ワルシャワの空気を入れかえる」と約束し、人々がナポレオンのように急速に出世できるよ

う、自分が跳躍板になると約束する。早くも、ポストや大臣の椅子を分配し始めている。その他にも約束に次ぐ約束……。彼は誰にでも、望みどおりのことを約束する。これこそワレサのいう「公的人事の革命的入れ換え」の意味するところなのだ。

私は個人的にワレサをよく知っている。そのうえで言うが、レフ・ワレサは決してポピュリストでも反ユダヤ主義者でもなかった。彼はそのどちらをも、ばからしいものと考えていた。ところが、「インテリ」に関するたわ言や、人間をユダヤ人と非ユダヤ人という人種的カテゴリーで分別する演説を通じて、彼は反知識人ポピュリズムと病的な反ユダヤ主義の信奉者たちの心に訴えかけた。それらの人々は今後ワレサの大統領就任を支持するようになろう。

ワレサは言う。「私は、この国で生まれた生粋のポーランド人だ」。この言葉で彼は、「生粋でない」「他所で生まれた」ポーランド人がどこかにいることをほのめかす。

西側の批判的報道について、ワレサは「誰かの触手が遠くまで延びている」という。強迫観念とほのめかしの混じったこの言葉は、どこかで聞い

たことがないか？

ワレサは言う。「私はノーベル平和賞受賞者として、中南米やアフリカでの和解促進に貢献したい」。その構想の詳細についてお聞きしたいものだ。

V　デマゴギーに絶好の時代

ここで問題になっているのはひとりポーランドのみではない。ポーランドは、ポスト共産主義諸国すべてで進行中のプロセスの先頭を切って進んでいる。民主主義制度はいまだ深く根づいておらず、経済は困難を極め、一方希望は大きく膨らみ、対立や衝突を解決する手段は頼りない。安定したとはいってもそれは脆弱な安定だ。

全体主義体制から民主主義秩序への漸進的変化は前例がなく、これまでに例のないほどに困難なものだ。希望が大きければ、そこから生じる欲求不満も大きい。民主主義的国家制度の再建や市場経済の導入には、新しい労働規範や新しい価格、赤字企業の倒産などがつきものであるが、それを理解していない人が大勢いる。民主主義の世の中に特有の新しい理念が急速に承認された一方で、共産主義対反共産主義抵抗活動という図式の時代に特有のものであった規範や理念の払拭が十分に行われていないのである。世界像はぼんやりと曇り、揺れている。これはデマゴギーには絶好の時代だ。政府を激しく攻撃するデマゴギーが成功を収めるかもしれない、そしてそれは状況の不安定化を導かざるを得ない。不安定は混乱へつながる。混乱からは新たな貧困と新たな独裁が育つ。繰り返そう。ポスト共産主義のすべての国が、こうした道に直面しているのだ。ロシアでもチェコスロヴァキアでもハンガリーでもルーマニアでも、どこでも過去の亡霊が蘇りつつある——ポピュリズムと誇大妄想と個人崇拝がひとつになった動きが、世界を陰で操っているのはフリーメーソンやユダヤ人だとする考え方を伴って蘇りつつあるのだ。この傾向は民主主義秩序に対する大きな脅威となる。

ユゼフ・ジチンスキ神父は次のように書いている。「ワルシャワ・ラジオの真夜中のニュースで、

© Piotr Wójcik

ステファン・ヤジェンブスキ教授の言明を聞いた。私はその内容に背筋が寒くなるのを覚えた。その言明はオーウェル〔ジョージ・オーウェル。英国の作家。『1984年』の作者〕と共同で書いたかと思えるほどであった。なぜなら、オーウェル流のスタイルでポーランド人が分別されていたからである——表向きはみな平等だが、実はその中に特権を持つより上位の人々が存在するという形に。言葉の面では、1968年〔3月事件の後、反ユダヤ・キャンペーンが繰り広げられた〕のゴムウカ一派のイデオローグたちの用語法との類似が目につく。もしわれわれが将来、このゴムウカ時代と似たグロテスクさのゆえに恥ずかしい思いをしたくなければ、もしわれわれがヴワディスワフ・ゴムウカをポーランド固有の民族神学の旗手とすることを望まないならば、早い対応を示さねばならない。私もまさにそうしたのである」（『ティゴドニク・ポフシェフヌィ』nr.41/2155,1990.10.14）。別の評論文では、彼はより厳密に表現している。「マルクス・レーニン主義において労働者または農民出身であることに基本的な重点が置かれたのと同様に、反知識人的な『ポーランド人ーカトリ

ック』モデルにおいては、最も中心的な意味を持つのは民族的純粋さである。こうした状況では、はっきりしてもいない『ユダヤ人の祖母』が、ビエルート〔1950年代前半までのポーランドの小スターリン〕時代に『伯爵家の血筋の祖母』を持つことで受けたのと同じ問題を引き起こしうる。どちらの場合も、病んだ思考法がはびこり始める。その思考法下では、論争は『地球は平らか』を論じるのと同じような無意味なものとなりさがってしまうのである」（『ティゴドニク・ポフシェフヌィ』nr.31／2145,1990.8.5）。

民主主義は、われわれ全員で気遣い守り育てて行かねばならない。ポルトガルやスペイン、ギリシャやチリでの民主主義の成功は、まさにそれによってもたらされたものだ。タデウシュ・マゾヴィエツキ政権誕生後、ポーランド民主主義が成功するかどうかも、まさにそれにかかっていると思われていた。すべての主要な政治勢力が、国民の希望の星たるこの政府を支持して（批判的支持もあったが）団結していくように見えた。完全な民主的国会選挙が実施されるまでのこの移行期は、妥協と和解の時期となるはずであった。それは政治・経済改革ならびに新しい外交政策のための条件であり、チャンスであった。

しかし、事はそうは運ばなかった。「連帯」を中心とした陣営はワレサによって分裂させられ、彼は「頂上での闘い」を宣言した。これによってポーランド人の間の和解は打ち壊された。本質的な議論に代わって、選挙キャンペーン特有の声高なレトリックばかり聞かれるようになった。今、われわれは新たな選択を迫られている――われわれはどのようなポーランドを望むのか？

Ⅵ　ポスト共産主義東欧の行方

西欧やアメリカ合衆国は、ポスト共産主義ヨーロッパを成り行き注視の静観策でながめている。当初の熱狂的歓迎が、今では不安に変わった――この〔東欧の〕国々はどちらへ向かおうとしているのか？　本当にヨーロッパに復帰しつつあるのか、それとも古いポピュリズム的独裁と、部族間闘争と、恒常的不安定へと戻りつつあるのか？

そして、ワレサがその発言によってポーランド問題に与えた損害は、まさしくこの点にかかわっていた。彼は、ポーランド＝不安定で常に対立抗争の絶えない国という印象を与えたのだ。

この印象は誤りであり、攻撃的でやかましい一部分がポーランド全体にあてはまるわけではないと私は考えている。西側のジャーナリストたちに対してもたびたびそう言ってきた。しかし、それを証明するためには、ポーランド人は本来寛容で、国際的陰謀に基づく汚い中傷の犠牲者なのだと繰り返すだけでは不十分である。この病的な一部分についてはっきりと口に出して語り、脅威をもたらしているポピュリズム、権威主義、誇大妄想という症候群に異議を唱えることができねばならない。

われわれはどのような道を行きたいと願っているのか？　民主主義的規範を持つ現代ヨーロッパへの道？　それとも反対に、アントネスク〔ルーマニアの独裁者、1940―44〕やホルティ〔ハンガリー王国摂政、1920―44〕の名に象徴される権威主義支配と民族紛争の地獄、極端な宗教的不寛容という過去の伝統へ逆戻りする道？　この問いにどう答えるかで、ヨーロッパにおけるポーランドの位置が決まってくる。

Ⅶ　沈黙は許されない

私はこの文章を書くべきか否か、長いこと考えた。書いた内容が誤って理解され、私が卑劣な意図でこれを書いたと言われるであろうことも、十分予想はついた。

それでも私は、これ以上黙っていてはならないと感じた。読者は私が間違っているというかもしれない。それでも私には、自分の正直な判断から導き出されたことはすべて書いたとの確信を持つ必要があった。それゆえに私は、レフ・ワレサが大統領になることはポーランドにとって破局的なことであり、中欧で最初のペロン〔アルゼンチンの大統領、1946～55、1973～74年〕的体制が出来るかもしれない、と言明した。国民的再生への大きな希望の中から結局残るのは美しき旗の悲しき断片がひとつ、その断片が独立自治労組「連帯」

全国委員会議長の飽くことなき権力志向の祭壇に置かれている、ということになるだろうと。もしこの警告を発せずに黙っていたならば、私は保身のための嘘に加担したとの意識にさいなまれたことだろう。

私はワレサが悪い意図を持っているとは言っていない。ただ、彼に想像力が全く欠けており、彼が民主主義的法治国家の何たるかを理解していない点を批判しているだけだ。ストライキや地下活動の時には力を発揮したワレサの政治活動方法は、民主主義秩序制度の建設の時期には危険な罠となる。全体主義体制を揺るがした行動様式は、今の世では育ち始めた民主主義政治文化の破壊を招かずにはおかない。カリスマ的指導者は、不吉な直感に導かれてあらゆる独立した動きを叩き潰し、ポーランドのもろい民主主義を破壊してしまうだろう。

われわれは、いま独立自治労組「連帯」議長が何を言っているか、よくよく聞かねばならない。彼の約束と脅しを、よく聞かねばならない。なぜなら、おそらく本人の意図とは裏腹に、ワレサは法律と民主主義的手続きの軽視を約束し、政治的反対者への報復と、素人考えと、不適格な人々による統治とを口にしている。テレビはワレサの公衆の前での演説をすべて放送すべきだ、それも何度か繰り返し、ノーカットで。国民すべてが、大統領選挙の投票で自分が何を選ぼうとしているのかを知らねばならない——後になって、選挙のときには情報が足りなくて、などと言い逃れることがきかぬように。

レフ・ワレサは人々を対立させる天賦の才を持った政治家であり、それゆえに極めて危険な存在なのだ。彼の偉大な功績は、その正反対のものに姿を変えることになる——ポーランドへの罵詈雑言に。それゆえに、私はレフ・ワレサに投票しない。

Ⅷ　権力と権威のシンボルマーク

レフ・ワレサによる「連帯」ロゴマーク使用権剥奪は、ひとつのしるしであった。それは「連帯」の終焉のしるしであった。「連帯」は私の人生の中で最も重要なものだった。私は、「独立したポーランド」への道は「連帯」を通じて達成される

と信じていた。私はかつて、「自由なポーランドとはいかなるものか」と自らに問うた。そしてこう答えた（1980年11月）。「自律的で、寛容で、多彩で、キリスト教の諸価値に裏付けされ、社会的に公正なポーランド。近隣諸国と仲の良いポーランド。妥協と自制の能力を持ち、現実的で互いにパートナーには忠実でありながら、隷属を拒み精神的隷従を潔しとしないポーランド。現代社会になら当然あるはずの対立や衝突に満ちていながら、連帯の原則がすみずみまで浸透しているポーランド。知識人は迫害された労働者を守り、労働者はストライキの際に文化の自由を要求に掲げるポーランド。熱情こめて自身を語りながら、自らを嗤うこともできるポーランド。幾度も征服されながら決して屈服することなく、幾度も打ち破られながら決して敗北することのなかったポーランド。今日ついにアイデンティティを回復し、自分の言葉と自分の顔を取り戻したポーランド……」。

内部にいかにさまざまな相違を抱えようとも、「連帯」は共通の、最も重要な価値の名において、一体性を保ち続けることができる——私はそう信じていた。今、私は敗北を感じている。

連帯の理念は断末魔の苦しみにあえいでいる。その責任はレフ・ワレサにある。私は死ぬまで「連帯」の人間であり続ける。しかし、10年来私と共にあった「連帯」ロゴマークは、最もプライベートな思い出の品々と一緒にしまった。法廷の判決文の写しや獄中で書いた本などの隣に。私はこの胸の痛みを隠しはしない。権力と権威を意味するようになったシンボルを支持したいとは決して思わないし、これまでも一度たりとも思ったことはない。「連帯」の文字のゆえに有罪判決を受けた時代、私はその文字を身につけていた。「連帯」の文字が特権を約束する時代、私はそれを身につけることを望まない。今は試練のときだと思う——

今こそ、われわれひとりひとりが何に値するかが明らかになる——シンボルマークなしのわれわれひとりひとりが。

〔訳：武井摩利〕

なぜ私はワレサを選ぶか—知識人主導を懸念する

ステファン・キシェレフスキ

Why I Choose Wałęsa, Stefan Kisielewski
Gazeta International, Issue 39, Nov.29th, 1990

【編集部注】 ステファン・キシェレフスキは1911年生まれの音楽家にして作家。長くカトリック系週刊紙『ティゴドニク・ポフシェフヌイ』に寄稿。1957～1965年、国会議員を務めた経験がある。最近は「連帯」の機関紙『ティゴドニク・ソリダルノシチ』のコラムの1つに定期的に寄稿している。円卓会議後の情勢を論じたインタビュー「問題の核心は何か」が本誌1990年3月号に掲載されている。 [訳：水谷驍]

私はワレサに投票する。この決断は、ひとつには『ガゼタ・ヴィボルチャ』紙の編集長アダム・ミフニクに負っている。

最近放映された1時間に及ぶテレビ番組「インテルベラツエ」でミフニクは、政府の「市場プログラム」は誰もが支持しているという一般的な指摘以外、経済について1度も言及しなかった。支配者集団の中心にいる政治家が経済についてまったく何の主張もしないということは人をいささか不安にさせるとはいえ、経済についての全員一致の呼びかけほど激しい抗議を呼び起こすものは他にない。自由経済は、反駁を許さない硬直したド

グマを拒むのと同じく、全員一致を嫌悪する。

いわゆる「バルツェロヴィチ計画」とその実行に対しては、経済の専門家その他の社会集団から多数の代案が提起されている。中央権力によるイデオロギー的圧力から解放された社会にあってはこれは自然なことである。社会科学の傑出した権威ヴワディスワフ・ピエンコフスキによれば、全体主義のあらゆる形態は知識人によって作り出される。その中に彼らは、二重写しになった、哲学的な、世界の「秩序」に関する自らの夢の実現を見るのだ。本来的に弾力性に富み、多様で、容赦のない競争を含み、何が出てくるかわからない要素をもった草の根的な自由市場は、全体主義の対極にある。それゆえに、「机上」の秩序や全員一致の呼びかけはすべて、その容貌と名称がいかに異なるにせよ、知識人によって導かれる新たな全体主義に対する不安を呼び起こさずにはいない。

このように考えて、私はワレサを選ぶ。彼は、中央政権の特定の集団とも、偶然的に選出された片寄った構成の国会がいつもやっているスコラ的な形式とも、理論家によって予言されたいかなる「哲学」とも無縁の人間である。

ワレサは経験主義者である。彼は、あらゆる類の草の根的な市井のでき事や市民たちの意見の風向きの変化に敏感である。彼は、自分の見解、自分の友だち、自分のやり方をいつでも変える用意がある。この敏感さとこのこだわりの無さが、中産階級を欠いた社会、重工業の破産、とりわけシロンスクの深刻な環境汚染地域やヴァウブジフやコニンなどのもはや存在しない「炭坑地帯」における重工業の破産のゆえに、数百万の労働者が失業に直面しようとしている社会にあっては、きわめて重要である。これらの人々に「労働者階級のエトス」のアナクロニズムと、共産主義的工業化というアナーキスト的原則の放棄の必要性とを説得できるのは、自身が労働者であるワレサをおいて他にはありえない。彼は、職業と社会的地位の変更の緊急必要性を平易に説くだろう。

転換の現在のプロセスの加速化は、おそらく多くの人々にとって苦痛であり、悲劇的である。私の信じるところ、このプロセスをコントロールできるのは、ワレサの経験主義と変化のリズムに対する彼の本能的な適応能力であって、現在の国会と官僚機構の働きに依拠する洗練された理論重視の政府ではないであろう。

こうした要素のすべてを考慮して、私はワレサに投票することに決めた。彼は、真の権力を保持し、自らを代表的機能に限定しない大統領になるだろう。

危険が伴うことはわかる。だが他に選択の余地はない。

キシェレフスキ

ポーランド経済：制約と機会

ツェザリ・ユゼフィアク

Obstacles and Opportunities in the Economy, Cezary Józefiak
Unsensored Poland News Bulletin, No.19／90,24 November 1990

【編集部注】　以下は、ツェザリ・ユゼフィアク教授がポーランド国会上院国民経済委員会に提出した報告書の要約である。政府機関紙『ジェチポスポリタ』1990年9月10日付に掲載された。　［訳：水谷　驍］

現在、すなわち1990年のポーランド経済は、政府の安定化計画実施前と違って、もはや中央計画経済ではない。しかし、同時にそれは、将来そうなることが期待されている競争的市場経済でもない。現状はおそらく生成期市場経済と呼ぶのが最もふさわしいであろう。

生成期市場経済

中央計画経済から市場経済への移行は、企業経営に対して2つの外的制約をもたらした。需要の制約と、免税措置および優遇信用条件を与えられなくなったことによる制約である。だがその一方で企業は、製品価格の決定にあたり広い自由裁量の余地を獲得した。

資本主義の企業は需要の制約には慣れている。しかしポーランドの企業がこれに直面するのは今が初めてである。国内需要の停滞を原因とする生産水準の低下を埋め合わせてきたのは輸出であった。多くの企業が現実にこうしたやり方をとってきた。ところが、輸出の成長率（下の表を参照）はそれほど高くなく（1989年上半期を通じてわずか3.3%）、したがって輸出の増加は生産の減少を補うには不十分である。それでも、交換不可能通貨（ルーブル）輸出の7.7%の減少を考慮すれば、主として交換可能通貨輸出の13.7%増加による全体としての輸出の拡大は重要な意味をもっている。

しかし、この数字から、すべての産業分野で輸出努力が成功したと考えてはならない。輸出拡大のためにいかなる努力がなされたかを各産業部門ごとに検討するならば、特定の財貨の国内需要の減少と輸出の拡大とが直接結び付いていないことがただちに明らかになる。下表にある繊維産業の数字がこのことを最もよく示している。

1990年上半期の輸出（1989年＝100）

	輸出合計	ルーブル地域	交換可能通貨地域
合計	103.3	92.3	113.7
紙	327.6	31.3	330.9
繊維	218.2	58.0	218.3
ロール鋼板	112.6	97.9	124.4
履物（ゴム以外）	68.2	19.7	163.7
綿織物	90.7	82.9	93.2
毛織物	83.6	72.5	84.4

免税措置が廃止され、優遇信用条件が適用されなくなったことに加えて、対外的制約に直面した企業は、原材料のサプライヤーに対して信用による供給を求めなければならなくなった。1990年半ばには、企業のサプライヤーに対する債務は銀行に対する債務の2.3倍に急上昇した（1989年は1.3倍）。しかもこれは、両者による合意の結果ではなく、買い手の支払いの遅延によるものだった。

強いられた商業信用

ある見解によれば、この強いられた商業信用の利用は、ひとつには企業間の債務の清算にあたるべき銀行が仲介者として効果的に機能していないことの結果であり、ひとつには当時のきわめて高

価な商業信用は利用しないという買い手の側の意図的な政策の結果であるという。しかし、企業の現実の行動を見れば、この2つの要因はそれほど重要でないことが明らかである。極端に長い待ち時間を短縮するために、ある段階から銀行は魅力的な割引率でただちに現金に交換できる小切手で支払える制度を復活させた。そのうえ、金利も毎月定期的に引き下げられた（1月の月40%あまりから6月には4%あまりになった）。だがこうした措置はいずれも状況を大きく変えるものではなかった。

商業信用の利用を強制したもっと可能性の高い原因は、財政的困難の進行原因となっている製品在庫の排除がますます困難になったという企業の側の事情にあった。企業側は、生産停止の可能性を示唆して政府を脅迫するという従来のやり方が今や問題になりえず、商業信用の利用だけが唯一の手段であることを認識したのである。

納入した製品の支払いの延期をサプライヤーの側が許容したのは、売れ行き不振に原因がある。だがそれにもかかわらず、多くの場合、この許容の範囲が債権者による債務者の債務支払能力の推定とはまったく無関係であることは1つの謎である。たぶん、経営の失敗が責任者の個人的資産にリスクを及ぼすことがないという中央計画経済体制に固有の特徴がその原因であろう。

商業信用の利用が生産不振の一層の進行を防いだことは明らかである。しかしこれには代償がともなった。構造的再編成がストップしてしまったことである。強いられた商業信用は一定数の非効率的な企業を生き長らえさせ、彼らに需要と新しい市場ルールへの適合を強制しなかったからである。

価格統制の大半が廃止されたあと、企業は直ちに、市場競争が存在しないという条件を利用して製品価格を高水準に引き上げた。サプライヤーは価格とその価格で売れる製品の量との最も好ましい組合わせを追求した。典型的な独占企業アプローチであった。企業がいかにこのアプローチを活用したかは、その収益率から明らかである。今年1～5月に報告された収益率は33.4%で、需要の大幅な減少にもかかわらず、1989年1～5月のそれを8.6%も上回った。収益率は総販売額に対する留保利益率で見てもきわめて高い水準にある。それは、製造業全体で14%に達し、7%以下の産業部門は1つも存在しなかった。

政府が中央計画制度を放棄したとき、企業の将来を決めるあらゆる政策の決定権はもっぱら企業経営陣の手に委ねられた。この状態は、経営権が最終的に私的企業所有者の手に移るまで続く。

特定産業部門で真に競争的な市場が実現するまでの間、競争的な輸入が国内価格の抑制効果をもつ。しかしこの面でもある種の制約要因が働いている。輸入は、国内製品価格が外国製品価格に連動して動く（交換可能通貨の為替レートや輸送コスト、品質の違いなどを考慮して）とき、競争力を発揮する。国内価格の大幅な上昇にもかかわらず、多くの商品についてこの条件は満たされていない。

以上の推計と推定は1990年上半期の数字を基にしたものである。下半期には、全面的な市場経済の実現に向けてさらに進んだ措置が取られるであろう。経済政策の修正（すでに実行中のものを除いて）も行われる。

国有企業の民営化

7月の国有企業民営化法に基づく産業の民営化が最も重要な枠組的変化の1つである。本年末までに最も効率的な国有企業群が株式会社に転換され、非効率的ないし環境に害を及ぼす企業群の一部が閉鎖される。閉鎖された企業が保有していた資産は売却されるか、他の企業ないし住民の使用に無料で提供される。しかし所有権のこの変更は国有企業の総資産額のおそらくわずか1%に及ぶにすぎない。したがってこの措置が本年末までに目に見える効果をあげるとは考えられない。しかしこの措置は、7月の国有企業民営化法を最初の実践的テストにかけるものとして非常に重要な意味をもつ。

制定された国有企業民営化法は、従業員持株制度と資本主義的資産所有との間の妥協である（……）。しかしこの妥協は、すくなくとも民営化の考え方そのものを無効にするものではなく、また

その目標の達成を困難にするものでもない。

国有資産の売却と株式の一般市民への譲渡という2つの原則の間で妥協が図られた。いずれの手段がどの程度まで活用されるのかは明らかにされないまま、両方の資産転換の方法が正当であると宣言されたのである。この点は、民営化の今後の段階で制定される具体的シナリオの中で決定される。資産は売却されるべきであるという原則は、外国人に関しては完全に正当化される。しかしこれがポーランド市民に適用される場合は、主として経済的なさまざまな問題が生じてくる。まず何よりも、市民は、数年の内に民営化を完了するために必要とされる資金を持っていない。しかも、こうして市民の貯蓄を政府が吸い上げてしまうことは、国有という考え方を復活させ、民営化の理念そのものに打撃を与える。貯蓄は、国有資産の民営化とは別に、私的セクターの発展のために使われるべきである。

本年後半にも予定されている経済政策の変更には、金利の一層の引き下げ、工業製品に対する輸入関税の廃止ないし大幅引き下げ、賃金物価指数の引き上げ、インフレにより公式指数に比して膨らんだ賃金基金に対する減税、などが含まれる。

賃金は、引き上げに対する制約が緩和される予定なので、今後、1990年上半期よりも急速に上昇するだろう。これがいかに国内需要を、したがって生産を増大させるかはよくわからない。そこでこの数カ月間、消費および需要との関連で個人所得がいかに推移したかを検討してみよう。

所得と消費との関係は経常収入の貯蓄率によって左右される。貯蓄率はこの数カ月間上昇を続けてきた。その理由はおそらく、価格上昇の結果として予備通貨ストックが一貫して取り崩されたことにある。貯蓄率と予備通貨ストックとの関係は以下のように推移した（予備通貨ストックは、1カ月の支出に対する平均通貨ストックの比率として月毎に推計された）。

1988年上半期＝14%：4.0%
同　　下半期＝13%：3.8%
1989年上半期＝16%：3.3%
同　　下半期＝18%：2.7%
1990年上半期＝22%：1.8%

Rys. Sławomir Burzyński

明らかに各世帯は最初、経常収入の貯蓄率を引き上げることによって購買力の低下を押しとどめようとした。人々がどのくらいの金額を安全な予備ストックと最終的に判断するのかははっきりしない。変動の激しい経済情勢が消費者の行動を一般的に不安定にするからである。しかし1990年上半期に報告された平均予備ストック率――収入のおよそ1.8カ月分――は下半期には上昇すると考えられる。本年1月に1.3カ月分だったそれは、6月には2.1カ月分になり、この上昇傾向は今しばらく続くものと考えられる。もしそうなれば、増加した収入のかなりの部分が個人消費には向かわずに、貯蓄としてとっておかれる。この場合、需要の増加率はその分だけ所得の増加率よりも小さくなる。

もちろん、実際の需要の大きさは人々が支出しようとする名目的通貨ストックだけで決まるわけではない。重要な役割を果たすのは、消費者の行動に対する生産者の反応である。言い換えれば、通貨供給量の増大がどの程度価格に影響し、どの程度供給を左右するか、である。非競争的な市場パターンでは、価格上昇が通貨供給量の増大分の

すべてを吸収してしまう。

ここで、1990年上半期の個人支出の変化を、価格変動分を調整したこの支出の購買力の変化と対比してみよう（支出と購買力に関する数字はいずれも1989年12月のもの。これを100とする）。

	個人支出	購買力
1990年1月末	119%	66%
2月末	108%	48%
3月末	133%	57%
4月末	156%	62%
5月末	160%	61%
6月末	169%	63%

以上の比較は、支出額の大幅な上昇が実質需要の同様の増大を伴っていないことを示している。後者は、当初低迷したあと、若干の上下を示したにすぎない。

しかし以上の数字は、生産が下半期もまったく拡大しようとしていないことを示すものと理解してはならない。ただ、生産の伸びがそれほど著しくない、という意味である。

経済効率の急速な上昇のために

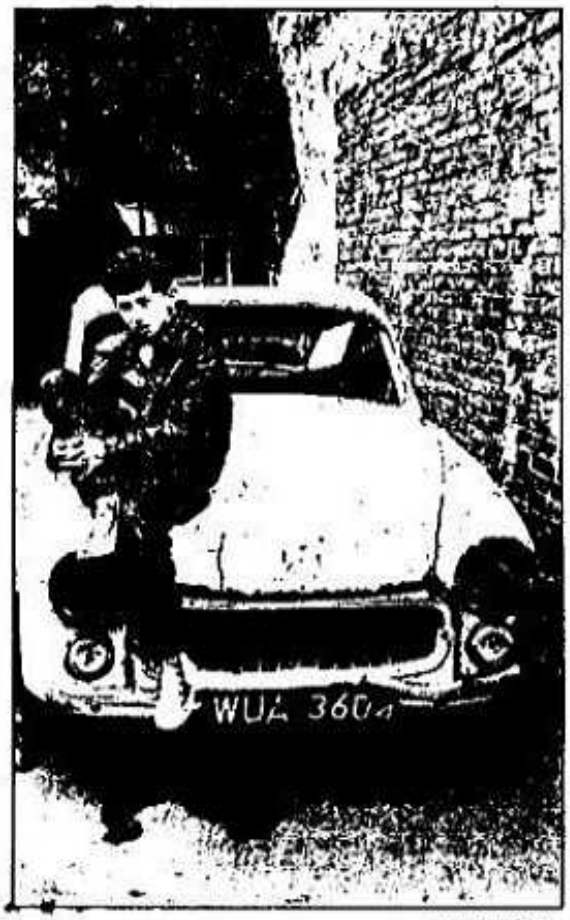
ポーランドの経済改革の最終的目的は、もちろん、生活水準を徐々に引き上げて先進諸国並みの水準にもってゆくことである。しかしこれは、ポーランド経済の効率が先進諸国のそれよりも急速に引き上げられる場合にのみ、実現可能である。そのためには、市場経済だけが唯一の可能性を与える。

効率を急速に引き上げるためには、ポーランド政府は以下の諸政策をとらなければならない。

＊西側テクノロジーを導入して、テクノロジー・ギャップを埋め、生産性その他の経済諸ファクターを大幅に引き上げる。

＊経済構造を国内および国外の需要に適合させる。これは構造的ギャップの解消を意味する。

＊民営化の進行に従って、ますます多数の企業を利潤を基礎にしたより効率的な経営体制のもとに組み込む。つまり経営ギャップを解消する。



fot. JACEK MARCZEWSKI

もちろん、個々の企業が新しい状況のもとで成功を望むことが必要である。これが、上述の3つのギャップを解消するための前提条件である。

ポーランドの生産性は西ヨーロッパのそれのおよそ3分の1である。この差をポーランドが1990年代中に解消することは完全に可能である。ただしそのためには、ポーランドが効率的な新しいテクノロジーの輸入に対して門戸を広く開放し、かつこのテクノロジーをその提供国で現在進行しているよりもさらに急速に改良してゆけることが必要である。これまでのところ、この方向に向けてはいくつか初歩的な措置が取られたにすぎない。そのなかで最も重要なのは、ポーランドの通貨の国内における交換性が実現されたこと、そして為替レートの統制が廃止されたこと（しかもそれにもかかわらず非常に安定していること）である。しかし、ポーランドが必要な速度で新しいテクノロジーの輸入を実現できるためにはさらに多くのことがなされなければならない。国内企業が単独でそのすべてを遂行することはできない。可能なかぎり多数の外国企業にポーランドで事業を拡大するよう奨励しなければならない。官僚主義を除

去し、ある種の心理的障害を取り除き、魅力的な法制度を整え、等々のことが必要である。何よりも、市場経済の導入のためにあらゆることがなされなければならない。（……）。

国内および国外の長期的な価格動向を考慮に入れた効率性の推計は、もし構造的再編成政策が分権的に行われず、あるいは個人投資家が自らの資金をリスクにさらさないとするならば、実践的には無用である。したがって、構造的再編成は、経済的プロセスを市場の諸力に従属させる制度的変革に先行すべきではない。それは、市場の諸力の影響のもとで推進されるべきである。ただしこのことは、技術的なインフラストラクチャーの拡充を進める中央ないし地方の政府機関の仕事にはあてはまらない。インフラストラクチャーの拡充は産業の再編成に先行しなければならない。

主役は市場メカニズム

国民経済の現状と将来に対して政治的に責任を負うのは中央政府であるが、経済政策が市場メカニズムに取って代わるようなことは絶対にあってはならない。それは競争に対してドアを閉ざすことを意味するからである。政府の経済政策の唯一の目的は、市場プロセスを補完ないし修正することでなければならない。しかし、合理的な介入政策は、一方で不完全な市場に起因する経済的、社会的な損失を防止する必要性によって、他方で経済全体を均衡状態に維持する必要性によって、正当化される。

市場経済へと移行しつつあるポーランドにおいては、介入政策は以下のいくつかの重要分野に限定されるべきである。

＊第1に、税制上の優遇措置、ないし再投資される企業利潤の免税措置を通じて投資が奨励されるべきである。こうした政策の基本目的は、事業活動の活性化、とりわけ失業率が高い分野におけるそれにある。

＊次に、中央政府が補助する安価な、部分的に償還可能なローンを通じて、住宅需要を喚起すべきである。

＊最後に、政府は、基礎的な農産物市場を安定させるための措置をとるべきである。このために中央政府が備蓄を行い、これを売却する。

民営化は、疑いもなく、ポーランド経済の将来を決定する核心的ファクターである。

しかしこのことは、急速な民営化の方が緩慢な民営化よりも望ましい、という意味ではない。全体の事業の合理性の判断にあたっては、ペースそれ自体は重要ではない。急速な民営化の要求は、おそらく、効率の上昇というその最終的なプラスの効果だけを考えて、それに伴う代償——生産と雇用の一時的な減少——を忘れているのである。こうした減少は、民営化に伴う企業の内部的変化に起因する。

新しい経済システムへの移行期の衝撃を緩和するために、民営化のスケジュールの決定にあたっては、その過程で生じると予測されるプラスとマイナスの影響を秤量することが必要である。

考えられる1つのアプローチは、産業部門を4つか5つのグループに分けて、1つずつ民営化を進めることである。民営化されたグループで生産と雇用が拡大しはじめれば、次のグループが民営化される。この方法で、生産と雇用の一時的な減少を相殺するメカニズムが始動するだろう。

労働組合と政党の役割

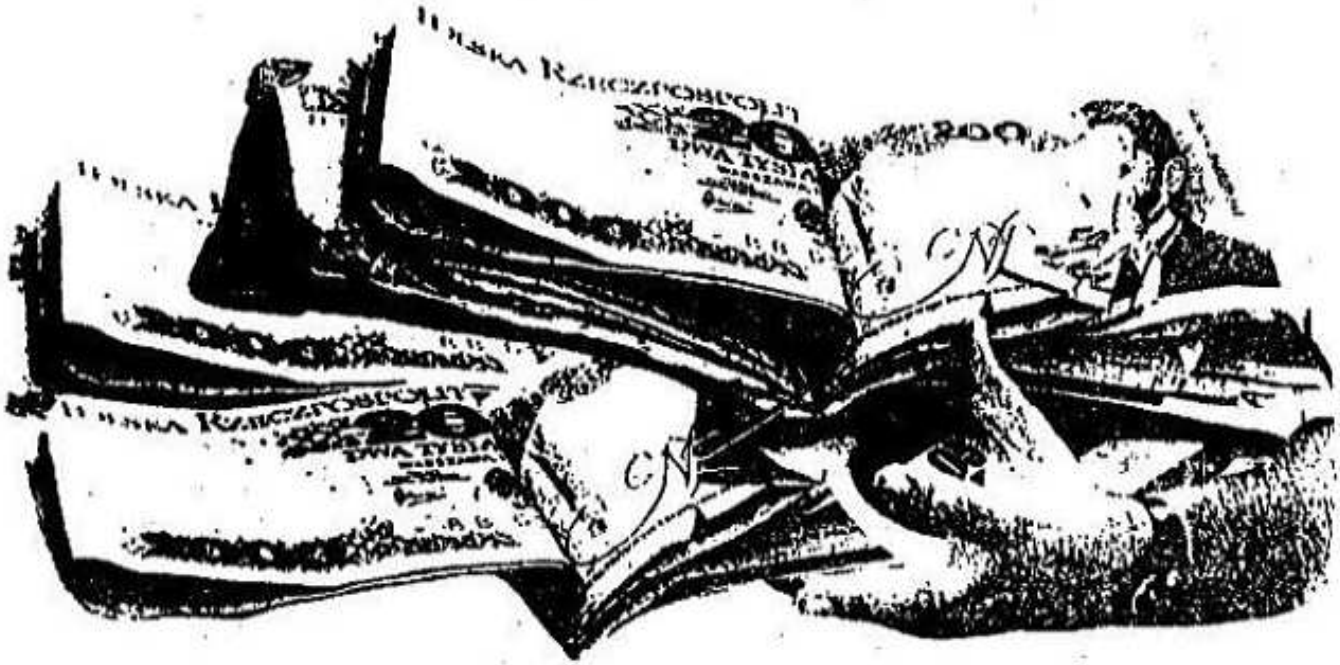
異なった経済システムへの移行に伴う厳しい衝撃から国民を守るためにいかなる措置が取られようとも、一部の人々が所得の減少への道をたどることは避けられない。現在の安定化計画は、程度こそ異なれ、あらゆる国民階層に、そしてまた各階層内部の大多数の人々に打撃を与える。われわれがめざす変化は国民の物質的地位にさまざまな影響を及ぼす。新しいルールに早く、効率的に適合できる人は、それだけ自らの状況を速やかに改善できる。それができず、あるいは努力が効果を上げなかった人々は敗者となる。市場のルールは無慈悲である。それは、中央計画経済システムのもとにおけるよりもはるかに厳しい状況の中に人々を追いやる。そして、自らの努力が市場によって認められるか、あるいは満足すべき所得を生み出すかは、誰も確信が持てない。

個人所得格差の拡大が、おそらく、国民の間に不満を生み出すだろう。このことが、合理的な介入政策の限界を超えないかぎり満たされることのない要求を育み、政治的変化を押しとどめる。

経営者と労働者の側の鈍感さが市場経済へと向かう途上のもう1つの障害となりうる。多くの企業において、生産と雇用の減少（原則として後者の方が遅れるが）にもかかわらず、人々は相変わらず相対的に高い賃金を得ている。こうした状況のもとでは、人々は普通、現在のシステムはそれほど悪くないと考えて、あるいはもっと重要なことだが、自らのためには安全なシステムだとみなして、それを受け入れようとする。当然、このことは、自らの安全感を損ないかねない所有形態の変更に対する不信感を生み出す。

民営化は他の方面からも抵抗に直面する可能性がある。競売で小売商店を売却することに反対してこの8月、いくつかの都市で展開された商店員の抗議行動の波は、おそらくこうした抵抗の1つの表れであった。地方政府当局は、地域的必要を満たす巨額の資金を得ようとして、小売店舗を競争入札にかけることを決定した。抗議行動への参加者たちはこの店舗に対して他の人たちよりも強い請求権があると考えた。たとえそれほど高額の所得が得られてきたわけではなかったとしても、これまでこれら店舗は自らの職場だったからである。

こうした障害、あるいはこれから問題となる他の障害が政治的変化を妨げ、後進性を克服しようとする経済の努力を遅らせるだろう。しかし、それは局地的な、一時的な緊張を生み出すだけに終わるかもしれない。いずれのプロセスも否定できない。その可能性は半々である。その場合、労働組合と政治的集団の行動が決定的なファクターとなる。労働組合と政党は、改革の加速化を推進することもできる。その一方で彼らは、この過程で不可避的に生じる諸困難を自らの政治的利益のために利用しようとするかもしれない。このいずれの傾向が最終的に勝利するかは、今後を見てみなければわからない。



Fot. Jerzy Gumarski. Collage Magda Zbrojewska

共産主義者のいない共産主義

テレサ・ボグツカ

Komunizm bez Komunistów, Teresa BOGUCKA
"Gazeta Wyborcza", 11 sierpnia 1990

わが国における共産主義の清算の仕方には奇妙なところがある。われわれは、1940年代と50年代の犯罪行為と、大きな社会グループが権力に対して公然と立ち向かったいくつもの事件を強調する。ポーランド人民共和国の歴史をわれわれは1956年、1968年、1970年、1976年、1980年という年号の集まりから組み立てようとする。それは分割の時代の状況、数々の蜂起を思い起こさせる。平均的なポーランド人にとっては、もっぱら蜂起しかなかったかのようだ。ロムアルド・トラウグットのようなツァーリの軍隊の士官がなぜ民族蜂起の指導者になったのか、といった疑問が気はずかしくなる。もっとも、この疑問は次の事実を想起させてくれる——蜂起と蜂起のあいだの数十年間、ポーランド人は3つの占領国のなかで普通に暮らし、宮廷とか行政機関とか軍隊で出世もしたことだ。

ポーランド人民共和国においても——ここ数年の祝うべき時期を除いて——事情は同じであり、われわれは共産主義体制の決まりに従い、好むと好まざるとにかかわらず、その価値体系にどっぷり浸っていたのだ。

ところがそのうちに、投票するのは1989年6月4日が初めてだ、今までのはまがいものの選挙だったのだから、もうメーデーの行進にはでかけないぞ、いつだって共産主義には反対だったんだ、などと言う人びとで一杯になってきた。他人の履歴の暴露に熱心な人びとや公正で不偏不党の裁判官がはじめて現れるようになり、その数はますます増え続けている。それは避けることのできない過程である（もっとも、神様はご存じだが、反対派がこれほど寿司詰めだったことは1度もない）。

価値の大規模な再評価が行われている。間もなく明らかになるであろうが、ポーランド人民共和国の時代は「不屈の民」がただ1度、占領のようなことをされたケースである、しかしその民は、犯罪的な共産主義者に決して屈伏せず、最終的には意に沿わない軛を振り捨て、その際、ヨーロッパの半分をも解放したのだった。

このような諸事実の全面的な塗り替えは、社会の精神衛生にとって必要だったのか、それともわれわれが常に自分たちのことを強大で悪賢い敵に包囲された温和で純粋無垢の民と考える誇大妄想につきものの一連の現象なのか　そんなことは現段階では本質的ではない。

では何が本質的なのかといえば、過去の45年を誠実に清算することを避けたまま、われわれが思いもかけない自由という重荷を背負い込んだことなのだ。その重荷はわれわれが手にしたチャンスをだめにしてしまうかもしれない。したがって、見てのとおり、いまは共産主義についてじっくり考えるには適切な時ではないにもかかわらず、それがわれわれの集団意識にもたらした荒廃について思いを巡らすことが必要である。まして荒廃は日を追ってますますはっきりと目に見えるものになっているのだから。

約束の地

受難と抵抗に対する称讃がますます強まっている、その流れに抗してわれわれは自らに問いかけなければならない——共産主義は戦後なぜ受け入れられ、信仰あるいは熱狂を引き起こすことができたのか。それはまた、外国軍のいなかったフランスやイタリアのような諸国でも同様だったのだ。

まさしく共産主義はユートピア実現の約束だった。昔ながらのユートピア——それは理想社会へ

の憧れだった。そこでは人は互いに平等であり、必要なすべてのものを持て、貧困もなく、余分な富もない、そこでは身分の低さも貧困も人間の成長を阻む障害にはならない。

共産主義イデオロギーはさまざまな手段によってヨーロッパ中にこの憧れを広めていった。東側においてはその憧れを生活レベルで血肉化させる実験が行われたのだった。

わが国においてはこの憧れは歴史的＝軍事的必然性によって強化され、さらにわれわれの独特な経験に書き込まれた― ポーランドはわれわれに与えられ、そしてまた取り上げられ、外国の思惑に沿って統治された。一方われわれにできることは、何よりもまず、ポーランドを心に留め、そのあるべき姿に思いを致すことだった。

わが国の傷だらけの歴史は、他国の社会が近代的な仕組みを造り上げ、新しい問題の解決方法を学んでいるとき、われわれにはそのチャンスが与えられなかったという思いにさせる。国民として、社会としてみずからの国家に対する責任を否定され、われわれは文学の世界に生きていた、というか、夢を見ていたのだ ――いつの日か傲慢と富が素朴さと貧困をおとしめることがなくなり、労働者と地を耕す者が誇り高く生き、その子供たちが貧しさ故に死ぬこともなくなり、学問への憧れのなかで生きる夢を、余持ちの気晴らしによる無駄遣いの一方で貧しい学生が肺病に生命を落としたり、才能ある農民の子ヤンコがバイオリンへの憧れをみずからの生命で贖ったりする不公正がすべてなくなる夢を……。

平等の権利と機会均等。社会的公正。教育、文化、医療を受ける普遍的権利。働く権利、住居を持つ権利、誇りを持って生きる権利。共産主義はこれらを一気に実現すると約束したのだ。

不正と貧困のない社会の創造を目指すひとびとは他にもいる。しかし彼らは、その理想が実現不可能であることを完全に理解している。もちろんそれは、そこに至る努力の放棄を意味しないが。

共産主義は宣言する、それは実現可能であると。それも非常に単純なやり方で。私有財産を撤廃するだけで十分なのだ。富める者から奪い、貧しい者へ与えよう。他人のための労働は許すまい。分配は均等にしよう。

すべては非常に素早くなされ、結果はたいしたものであった― 広範な社会サービス、教育と文化の普及、都市化と工業化。その他の問題については、周知のとおりひどいものだったが、それもコストとして見逃された。さらに福祉の問題（それぞれの必要に応じてすべてを与える）が残された。それを実現するために共産主義者は特殊な科学的思考を採用した。極めて単純――新しい社会主義的意識を持った新しい人間の創造である。そのためには社会的関係を変えなければならなかったが、当局はその過程を早めることに決めた。何年間にもわたる徹底的な教育により、社会主義的人間は何千年も前から人間が持っていたのとは異なる欲求を持ち、異なる動機により労働するようになった。自分自身のためにではなく、（必要に応じて）すべてを与えてくれる「社会のため」に働くようになったのだった。

しかし、知ってのとおり、壊すほうが建設するよりもやさしい。共産主義は勤労精神を破壊した。おそらくはそのためであろう、意味のある労働とその結果である満足感との自然な関係は、無意味

な苦痛とそれに隷属する快感という奇妙な関係にとって代わられた。

共産主義者は去った。彼らの犯罪と体制の無能力は弾劾された。しかしエデンの園への憧れと、それが疲れ切ったポーランド国民にとっての約束の地であるという信仰はいまもなおわれわれの心に巣くっている。「良くなるはずが悪くなった」という不満の声はますます高まっている。しかしそれこそがわれわれの心に共産主義的ユートピアを根づかせる原因ではないのか——他の幸運な国々が何十年も働いて得たレベルへ、なんらかの特別な手段によって、より早く、努力せずに一気に到達したいという気持ちが。

その上、マゾヴィエツキ政権は、すぐに良くなるとは決して約束しなかった。その反対だった、2、3年後にはもっと悪くなると言ったのだ。われわれが聞きたかったのは単純明解な約束だったのだ、われわれは長年それと共に生きてきたのだから。われわれは意識的であれ意識下であれ、結局は良くなるという単純明解な提案をだれかがしてくれるのを待ち望んでいるのだ。

平等と公正

約束の地は常に地平線の彼方にあり、空に映える朝焼けが、社会的公正が、そこへ向かうわれわれの歩みを助けてくれる。

社会的公正、それは左翼の基本的価値観である。その理念は階級社会との闘いのなかで生まれた。階級社会において人間の運命はその生まれが領主であるか商人であるか、あるいは既番であるかによって決まっていた。そこで左翼は権利の平等を、後には機会均等を求めた。時とともにその機会均等はもはや政治問題でなくなり、つまり実現されて議論の余地のないものになるか、あるいはその実現方法の問題だけが残された。スウェーデンでは福祉国家が成立し、アメリカの学校では白人と黒人の強制的な共学が行われた。ドイツでは外国人労働者2世たちの融和策が実行され、いまではそれに東独の貧しい親類たちも加わるようになった。

一方、共産主義は社会的公正を総体的に、なんにでも等しく通用するものとして扱い、近道を通ってすべてのものごとの究極の解決を図ろうとした。最初に取り組んだのは歴史的不公正であった。共産主義は富める者から奪い、貧しい者へ与えた。ある者は教育を受ける権利を持ち、ある者はそれを否定された、なぜならそれは何世紀ものあいだ逆さまだったからだ。ブルジョアジーのぬるま湯的な権利の平等と機会均等が、今度は、われわれの胃袋の根本的平等にとって代わられた、それこそ、真の平等の基礎となるべきであったのだ。

遺憾ながら、神の摂理によれば、われわれはひとりひとり多種多様な人間であり、与えられた才能や容貌、健康、その他の長所は平等ではない。共産主義はにわか造りの兵舎であり、耐久性はなかった（もっとも、朝鮮、あるいはアルバニアはまた別の話になるが）。

はるかに簡単だったのは所有の平等であった。人間の本性にはもともと暗黒面があり、そこには嫉妬心もある。この嫉妬心につけ込み、共産主義は独自の社会的公正感を植えつけ、成功を収めた。共産主義政権にたいする全国的、地方的な反乱が起きた原因はさまざまであった　反乱は文化の抑圧や教会への嫌がらせ、物価値上げ、全般的絶望感にたいするものだった。決して、土地や家、薬局、製粉所、アパート、工場を奪われたからではなかったのだ。貧しい社会は、豊かさとは非難すべき、あやしげな代物であることを喜んで認めた。「富農」、「小売商人」、「野菜栽培農家」といった言葉は、国の機関に職を得るというまっとうな道を踏みはずして、代わりにささやかな稼ぎを得た人びとにたいする蔑みと妬みの感情を示すものとしてよく使われた。

われわれ自身もまたその平等を守ろうとしていたのだ。税務署はいつだってだれかが自動車を買ったとかいう密告を期待できたし、当局は、「青い鳥〔放浪者〕」や「日曜日生まれ〔浮浪者〕」、「社会の寄生虫」、「投機者」などにたいする闘いにおいてすぐに反応を期待できた。

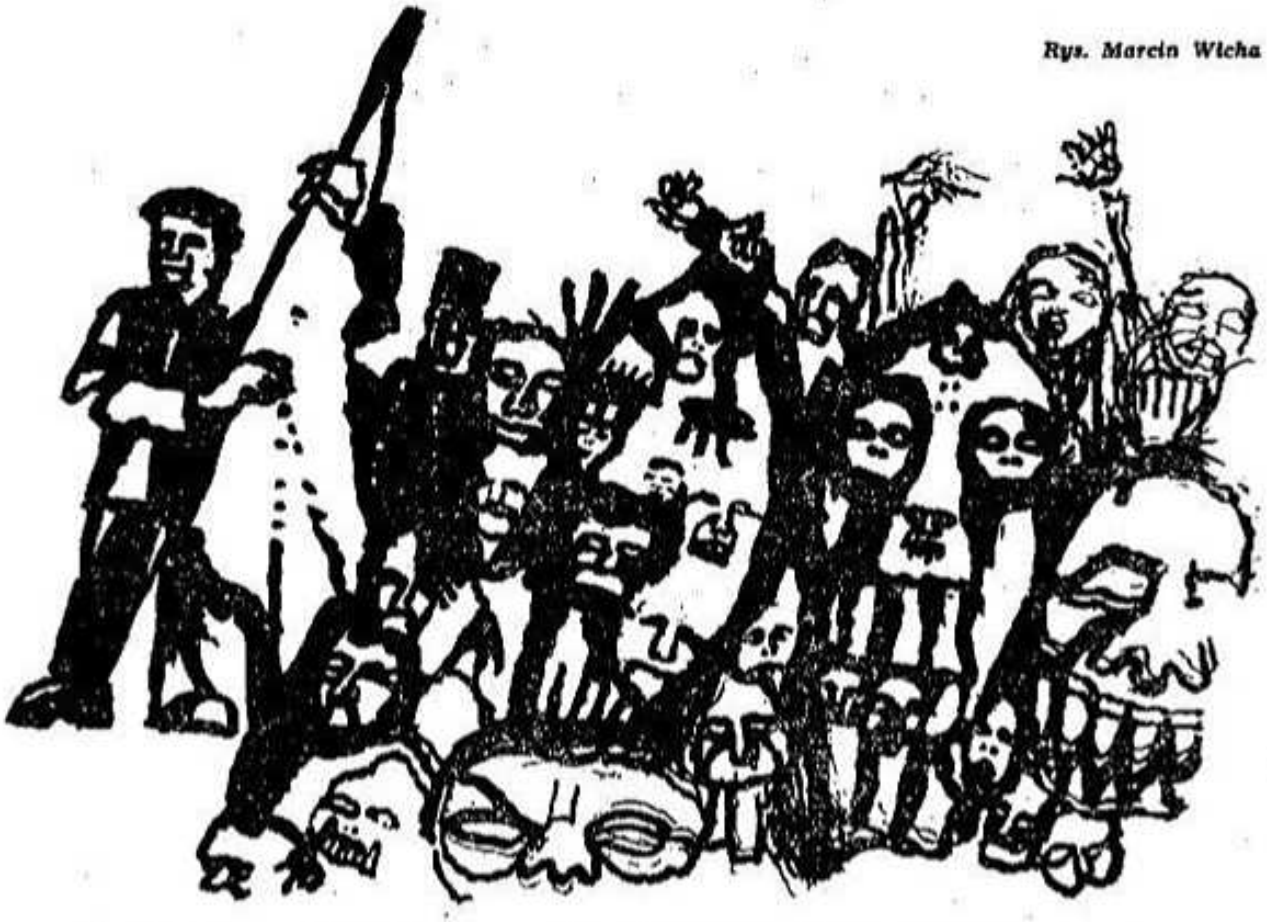
われわれは、いつもお互いを非難しあっている（「農家はいいな、連中の建てた家をみてみろよ」、「街じゃ4時までただ座っていればいい、それで仕事はおしまいだ」、「おれの生活はすべて仕事

だ、なのに手元には何一つ残らない、お隣さんは別荘を買ったというのにどうだ」）が、当局が共同体のパンを分配し、すべてをわれわれに与えてくれることはあたりまえのこととして受け入れている。だからわれわれは仕事に通うのだ。

これからはすべてが変わる。個人のイニシアチヴがわれわれのチャンスとして現れる。しかしそのチャンスにありつくのはまたしてもかつての共産主義者たちなのだ。これは歴史的不公正の例である。会社の会計監査と不当利益の返還についての法律が生まれようとしているにもかかわらず、法律を作るよりも会社が得たものを徴発する方がよいという声が聞こえる。一般的に公共的＝政治的議論で「会社」という言葉を使うと、それはまるで「いかがわしい商売」と言っているように聞こえる。そして「あなたは会社の株主なのですか？」という質問には告発の響きがある。平等についてもわれわれは後へ引くつもりはない。かつて共産主義は恐れられていた、しかし実のところ、だれにでも等しく胃袋はあり、飲み食いする権利もまた同様である。いまや全国的な平均値をめぐって熱気が高まりつつある。各職業グループはなんらかの取り分を得るため、また、自分たちのろくでもない製品を買ってもらうために、特典や補助金、保証を与えてもらうために闘っている。与えるのはだれなのか？　国家が与えるべきだ。平等かつ公平に。

階級本能

権力を手にした共産主義者は第２共和国〔第２次大戦前のポーランド国家〕――それは今日、失われた楽園として意識されている――を厳しく非難した。1939年の〔開戦時における〕国家の弱さ、恐るべき貧困、収穫期を前にした飢饉、ポーランド人の３分の１を占める字を読めない人。この負債の存在を疑うものはだれひとりいなかった。それは、ＰＳＬ〔ポーランド農民党〕に結集していた当時の反対派にしても同様であった。それどころかＰＳＬは、ポーランドは戦前とは全く別の国家に再建されなければならない、という当時の一般の感情に従い、農業改革と産業の国有化を支持したのであった。つまり当時にあっては、体制変革に関してはこの点で社会的合意が存在したの



だ。心底から望まれたかどうかはともかく、少なくともそれが適切と考えられていた。そしてそのための法の枠組みも存在したのだった。

ところがそれにもかかわらず共産主義者たちは、法を犯し、規則をねじ曲げ、恐怖を呼び起こす革命的雰囲気のなかで搾取者へ復讐し、略奪されたものを略奪しかえすというやり方で、それを実行しようとした。彼らは自分たちの目的のために改革を利用した。すなわち社会の構造と絆の破壊である。そのためには人民の怒りはきわめて有益だった。しかし、何世紀にもわたる搾取のあとで人民がついに権力を握るのだと主張した共産主義者たちは、ただ偽善的なうそを言っただけではなかった。ある意味で彼らは本当のことを言ったのである。ポーランド人民共和国の最初の10年間、労働者出身あるいは農民出身の者には大きな出世の道が開かれた。実現の舞台となったのは主として貧しい、人口過剰の村々である。そういうところから何十万という人びとが都市へ、工場や行政機関、軍隊へと出ていった。住み慣れた土地から引き離された人びとは人民の権力に全面的に身を委ねることになった。

こうした変化は騒々しいプロパガンダの伴奏付きで進行した。それは、農民文化のなかに脈々と受け継がれている素朴な人民の道義的力とか、文学に描かれた人民の姿とか、ただ労働者階級のみが現実を正当に認識できる独特の性質を所有し、正しい選択を下すことができるというがさつなマルクス主義とか、そういったものの混合物であった。さらに、労働者階級の選択は、当然の結果として、社会全体、あるいはまた全人類にとって客観的に善であるという。この性質は「階級的本能」と呼ばれ、それは賃金労働者が集団で肉体労働に従事している場合に生まれるとされた。鍛冶屋はたとえ工場労働者と同じようにハンマーを振り回したとしてもそうした本能はなかった、なぜなら、彼は自分の仕事場で働いているのであり、意識は小市民のものだからである。農民は集団化し、さまざまな労働者と交わってはじめてその本能を得るチャンスに恵まれるのだった。知識人たちのチャンスについてはきわめて惨めな状態だった――しかし、自分の中のブルジョア的反応を必死に

なって押さえつけ、労働者階級の声に真剣に耳を傾ければ、階級に奉仕することができた。

この共産主義のプロレタリアート像におけるひとつの特性、すなわち集団的労働という側面だけは真の重要性を有していた。なぜなら、打ち砕かれ、骨しつけられた社会においてそれは集団的蜂起の可能性をもったからである。

1956年、はじめてそれが現実に起きた。

時と共に権力は革命の精気を失って官僚化し、徐々に特権階級へと成長していった、そして――彼らの規準にしたがえば――反動化していった。労働者階級を恐れると同時に、軽んじるようにもなったのだ。ポーランド人民共和国に育った第2世代は、正当にも、政府に負うものは何ひとつない、せいぜいが、灰色の生活と混乱状態、いたるところに見える非効率ぐらいだと考えている。

共産主義イデオロギーは崩壊し、権力は新しいアイデアを探し求めた――ある時は経営管理主義に立ち、またある時は愛国主義に立った。しかし労働者階級礼讃は放棄しなかった。第1に、それは、任意であれ、強制であれ、かつて社会に受け入れられたある種の統治の仮証明であったから。

第2に、革命的装いの労働者階級礼讃は危機の際に有益であったのだから。頑強に抵抗する知識人や学生、ラドムの労働者たちを鎮める必要があった時、大衆集会の演壇に作業服を着た人間を押し上げ、彼に、教育はあるが辛い労働のことは何も知らないくせに人民ポーランドに向かって拳を振り上げるひとびとをどう思っているのかを労働者言葉で喋らせればいいのだ。新聞の紙面を投書で埋めるのもいい――私はただの旋盤工ですがあの若者たちを許せません、労働者や農民のお金で教育を受けたくせに……。大衆集会を召集してもいい、そこではタールで汚れた顔をした坑夫たちが横断幕を掲げるのだ――労働者階級は騒ぎ屋たちを弾劾する、と。

そして「8月」が来た。労働者階級は一瞬にして左翼の最高に理想的な夢を現実のものとしたかのように見えた。しかし実際は左翼的諸価値が逆転したのである。労働者階級はみずからの利益のための闘いを通じて共通善のために闘う革命勢力ではなかった。彼らはひたすらに共通善を追い求めた。彼らはまた口々に戦いの歌をうたう反逆者集団でもなかった。歌ったのはむしろ教会の歌であった。権力を求めて闘ったわけでもない、求めたのは分別のある統治であった。しかも彼らは決して労働者階級ではなく、ただ単に労働者であっただけなのだ。そして、知識人、芸術家、学生、役人、ストライキに入った職場や大学からのさまざまな職業を代表する人びとと共同で仕事をなしとげたのだった。全員が自分たちをみんなと同じ、国の将来に責任のある市民であると感じていた。それは後に「連帯」の精神と呼ばれた。

それからすこしばかりの歳月が流れた今日、「連帯」の精神はあまり多くは残っていない。労働者階級が舞台に戻ってきた、しかも共産主義的になって。革命的スタイルが戻る――素朴な人民こそ、教育はなくとも、本能によって物事の本質を突く、という主張とともに。

それが「連帯」の大会で見られたことなのだ。バルツェロヴィチ〔首相代理・蔵相〕との論争のなかで組合活動家たちは、社会＝経済的問題については精通しているはずなのに、これみよがしに無知をひけらかし、デマゴギーを振り回した。あなたはポーランドの子供たちのためになにをしてくれたのか？　――彼らはほとんど階級的義憤にかられて叫んだ。

テレビで見ている何百万もの人びとの前で、グダンスクの組合員たちは国会の仕事などなにも知らないことを誇示し、彼らの父や祖父たちが人民委員に吹き込まれて、かつての地主や金持ちをののしったのとまったく同じように国会議長に罵詈雑言を浴びせた。彼らは自信満々、昔と同じまるでばかげたことを言った――歴史的不公正を埋め合わせれば、物事はもっと良くなるだろうと。

造船工たちは上院議員（社会全体の代表）たちを呼びつけ、議員たちには理解することのできない「まっとうな真実」を労働者言葉で宣言した。彼らは議員たちを脅し、学ばせ、思い出させた――労働者階級は社会において特別な地位を占めているということを。

共産党はもはや存在しない。しかし長年にわたって頭に叩きこまれたことはいまなお抜けきれない。

ここにはまさに、労働者と農民のほうがよく知っているし、よく見ているという信念がある。それに彼らの声のほうが学者や商人、経済学者の声よりも重視されるべきだという確信もある。

もちろんすべてが注目されなければならない。民主主義は、労働者の声も「野菜栽培農家」の声も同じ価値を持つことが基本である。だが、国家の行う決定において労働者と農民が他のポーランド人よりも大きな権利を持っているということ、それは共産主義者のいない共産主義という神話の実現である。

それは進歩と発展の奇蹟的処方箋への信仰に似ている。努力もしないのに繁栄が手に入るという信仰である。

それは平等の守り手にしてすべての富の分配者という国家観にもあてはまるのだ。

社会主義はどこに？

ポーランド・グダンスクを訪れて

清水　正徳（全造船機械函館ドック函館分会）

グダンスクはやはり「造船の街」であった。レニングラードから国境を越え、アエロフロート機がグダンスク市の手前から低空飛行に入ると、川をはさんで対岸の島との両側に船台と多数の工場がひしめき、クレーンが林立している。造船所一帯は夏の日差しを受けギラギラと光って見えた。

モスクワ、レニングラードに続いてグダンスクに入ったのが８月７日夕刻。ポーランド北端のバルト海に面する街は、上空からの印象と異なり、８月とは言え、冷たく、静かであった。宿泊先のヘベリウスホテルから望む旧市街の街並みは、中世に戻った感があり、翌日は旧市街、ヴェステルプラッテ（第二次大戦勃発地）の観光コースを見てまわる。

そして、ここも観光コースの１つである「1970年犠牲者の碑」は、グダンスク造船所第２ゲート正面左側の広場にある。食肉値上げ反対に決起した労働者が、デモの際に警官に射殺された70年12月事件の経緯は、「ワレサ自伝」に詳しい。またこの事件こそが、67年にこの街に来たワレサが、労働者と革命の渦に飛び込む契機となり、それ以上に、80年夏に開花する造船所労働者の歩みの転機をなすものであった。

広場中央に造船所労働者の手で作られた巨大な記念碑が立つ。下部はこの国の人民が強いられた受難と絶望をあらわし、上部には希望と前進を意味する十字架と錨が下界を見おろす。造船所側の壁にミウォシュのメッセージと犠牲者の追悼碑があり、ここも花とローソクが絶えない。そしてこの広場こそ、80年夏のストライキの際「21項目」を政府にせまって占拠を続ける造船所労働者に会う家族や、市内はもちろん、ポーランド各地から激励に駆けつけた多数の市民で埋まった場所で、緊張する交渉と闘争の合間に何度かミサが行われた場所である。

「連帯」本部で

「連帯」本部はワルシャワにあると思っていた私達にとって、記念碑近くのビルの上に翻る「連帯」ロゴマークの旗は驚きであった。多数の関係者が活発に出入りする本部の１室「国際局」で、アンナ・ヴォランスカさん（女性）に話を伺う。

……日本を含め西側では最近、マスコミが「連帯」分裂を報じ、私達も残念に思っているが。

――市民委員会が解散し、ＲＯＡＤと中央同盟がそれぞれ活動を開始したことを報じているのでしょうが、労働組合としての「連帯」は統一したままです。西側の報道は正しくありません。

――「連帯」をめぐる政治路線について。

確かに「連帯」内に活発な論争があります。その１つは党をどうつくるのかの問題で、ゲレメ

グダンスク造船所労働安全ホール。「連帯」結成10周年記念集会の飾り付けがすすんでいる。

クのグループは、以前の共産党にかわる単一の全国党をつくるべきであると主張しています。これに対してワレサは、党は労働者や農民など、階層ごとに必要に応じてつくればいいと主張しています。

――「連帯」本部の活動について。

――この本部が全国の30を超す支部を網羅し、グダンスク支部もここにあります。以前は資金や機材が豊富にあったのが、戒厳令で官製派がこれらを持ち去ってしまったため、充分ではありません。

――ワレサ議長は。

――ワレサは家族と一緒にバカンス中で、16日には戻り、「連帯」10周年記念行事を準備することになっています。

グダンスク造船所の現状

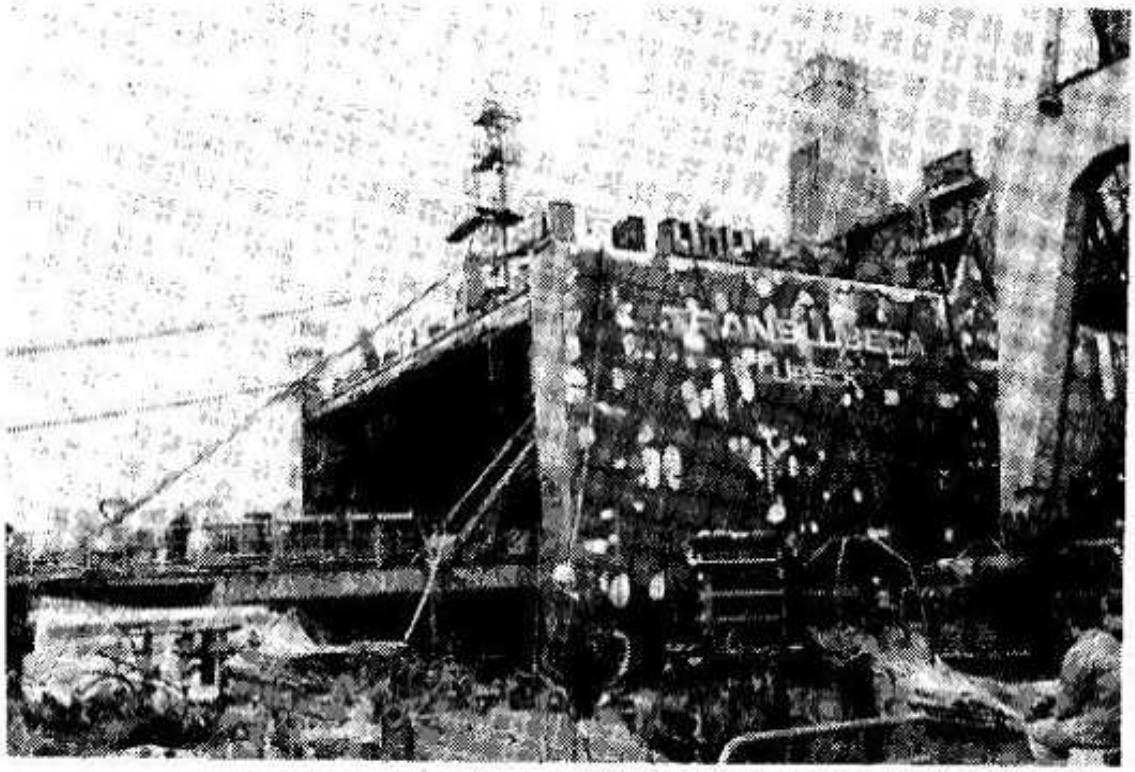
グダンスク訪問の最大の目的は、何と言っても造船所訪問であった。ロイド世界統計にも名を連ね、東欧圏最大の造船所の1つで、もちろん80年「連帯」発祥の地であった。造船所支部にホテルからの電話や第2ゲートで直接会見を申し入れるが、指導部のほとんどがバカンスで留守、英語を話せる人がいないと言うことで、再び連帯本部の国際局に依頼し、9日11時に英語＝ポーランド語の通訳をかねて同行してもらう。国際局の若い男性、私にむかい「ユー、レンゴー？」　私「イエス。総評系連合。日本の造船所は大手の全部が、経営者と同盟がグルになって分裂工作をしたため、総評は少数派だが、私の造船所が唯一総評がマジョリティを維持している」。

第2ゲート左側の造船所支部で対応してくれたのは、ワレサ側近とおぼしき女性書記の人で、30年くらいこの造船所に勤めたが、「連帯」活動家ということで戒厳令後の反動で解雇され、昨年の「連帯」復権後、再び勤務しているとのこと。約30分、話していただいた内容は次の通り。

――全従業員は現在は約8,000名。そのうち女性労働者は2,000名で、生産現場には配属されず、事務、管理部門のみ。労働時間は午前6時30分から実働8時間、週休2日制である。

――「連帯」労組の活動は賃金引上げや労働条件、福利厚生の要求の他に、設備改善の要求も積極的に取り上げ、ここ数年で重量物を運ぶクレーンの新設と、労働者が構内を移動するためのバスが導入された（確かにクレーンが多い）。

――平均年齢は40代と高く（最近の日本も高く、



グダンスク造船所で建造中の西ドイツ向けフェリー。

函館ドックは45歳）若い人が来ないのが悩み。定年制は以前65歳だったのが、「連帯」の取り組みで男55歳、女50歳に短縮され、戒厳令でまた元に戻ったため、現在再度短縮するため取り組み中。——労使交渉の相手は経営者だが、これはポーランド政府そのもの。（西側ではアメリカ資本による民営化の報道があるが）1年以内に株式を公募し株式会社として再出発する予定。安全衛生の面で最近女性労働者がアスベストで死亡したため、対策を強めている。

私の方から、81年3月にワレサと「連帯」の将来を案じながら93歳で世を去った荒畑寒村の遺族から託された「荒畑寒村　人と時代」「寒村自伝」を贈る。

このやりとりのあとで、「構内を案内しますか？」の問いに、「もちろん」。最初に案内されたのが「労働安全ホール」。80年8月31日、21項目合意がワレサとヤギエルスキ副首相の手で調印されたステージには、間近にせまった「連帯」10周年の飾り付けが行われ、2人の組合員の手で会場準備が進められていた。ホール両側には10年を記録する写真パネルが展示され、ひと通り説明を受けるが、やはりレーニン像は撤去された後であった。

次に見学したのがエンジン製作工場。函館ドックや日本の造船所で言えば「機械・仕上工場」で、ここで30人ほどの人員がポズナンから来るエンジン本体鋳物を2～3カ月かけて加工する。並ぶ旋盤機械の風景は、函館ドックで言えば20年程前のもの。この工場に面している岸壁では、西ドイツ・リューベック港籍のフェリー「ポセイドン号」を建設中。工場設備も全般に古く、作業中や構内を歩く労働者を見た感じでは、安全保護具や作業服は充分ではないようだ。

強まる西側志向

構内見学から第2ゲートにむかう途中にあるモニュメントの前で足を止める。旧名「レーニン造船所」の由来は「ワレサ自伝」にも記されているが、それはレーニン記念碑であった。

レーニンが住んでいた場所の土を持ってきて地下に埋めてある。敗戦前日本の「御真影」に似た記念碑にされたレーニンも迷惑であろう。近く撤去の予定という。案内の2人、「ソ連の新造船を永年にわたって建造してきた。修理船も手がけたが、国内で修理できない劣悪な船をまわしてくる。代金も現金で払うことは少なく、石油やガスの現物で払うが、これがひどい代物」と、ソ連への批判は徹底している。

国家の中央にクレムリンがそびえ立ち、上からのゴルバチョフ革命が混乱と逡巡をくり返すソ連に比べ、89年選挙後のポーランドは、政局の安定をはかりインフレを押さえこみ、外国資本投下によって生産拡大をはかることが期待されている。民主化が進む東欧にあって、市民的自由の歴史と経済システムの点で東の大国より遥かに優位に立つポーランドの将来は、しかし急速に西側志向を強めつつある。それは「われわれは真の意味で社会主義というものを体験していないのではないか。社会主義であろうと資本主義であろうと、いいものはいい」から、戒厳令の後、一転して社会主義の一切を投げ捨てるにいたるワレサと「連帯」が直面した10年の歴史の結果である。ポーランド訪問の最後に訪れた首都のワルシャワ大学近くのショーウインドーで見た風刺漫画が、この辺のところを痛烈に物語っている。

ワルシャワ大学付近で見付けたポスター。ワレサが笑い、マルクス、レーニンはうなだれる。

【2頁から続く】
チ（ポーランド共和国社会民主主義＝旧統一労働者党の一部）、レシェク・モチュルスキ（独立ポーランド同盟）、スタニスワフ・ティミンスキ（カナダの実業家、白山党党首）。「闘う連帯」のコルネル・モラヴィエツキは有効署名者数が規定の10万人に届かず正式登録されず。●ＯＫＰが定款改正を討議。激論の末、定款全体の一括採決提案に抗議してＲＯＡＤ（市民運動－民主行動）系代議員多数が退場。ＯＫＰ幹部会は解散、11月７日に新幹部会を選出することに。

10月26日　下院、通信に関する法案を可決。電信電話およびラジオ・テレビ放送の国家独占を廃止。●世論調査センターＯＢＯＰが10月22－23日に行った調査の結果によれば、大統領選でのワレサ支持は33%、マゾヴィエツキ支持は28%。

10月27日　ワレサ付属市民委員会が総会。議会早期解散要求決議案を否決。また大統領選において委員会全体でワレサを支持するとの決議案も否決。

10月29日　６人の大統領候補全員によるテレビ討論が放送される。●ビリンスキ農相、農業政策骨子を政府に提出。●政府、独占的国営出版コンツェルンＲＳＷ"プラサ"の解体を承認。同社所有の約120の新聞雑誌および数カ所の印刷工場は来週のオークションで売却される（約70の新聞は編集部に無償譲渡）〔本誌1990年12月号参照〕。●「連帯」全国指導部のスト中止決定にもかかわらず、シチェチン市内交通労働者が警告ストを行う。●ワルシャワ県裁判所、1960～70年代の汚職容疑で一時逮捕されていたＭ・ミレフスキ元内相ら内務省関係者７人の釈放を命令。

10月30日　ポーランドと南アフリカ共和国、恒常的外交関係を樹立。

10月31日　ビエルスコビアワの市内交通労働者、賃上げ要求スト。当局との交渉が持たれたが、当局側の提示を労働者が不満として決裂。●検察官、前日の裁判所による内務省関係者釈放命令に異議申し立て。●外国投資家商工会議所の報告によれば、1989年度のポーランドの外国との合弁事業は949件。外資企業の市場シェアは2.5%、平均利潤率45%、ポーランド企業に比べ平均10%高賃金。

11月３日　10月29～30日に行われた世論調査センターＯＢＯＰの調査結果によれば、大統領選での支持率はワレサ33%、マゾヴィエツキ26%、バルトシチェ６%、チモシェヴィチ４%、モチュルスキ２%、ティミンスキ２%。なお、別の調査機関ＣＢＯＳの調査はマゾヴィエツキ42%、ワレサ33%と逆の結果を示している。

11月５日　閣議で1990年のポーランドの国民所得が前年比15～17%減の見通しと報告される（主として国営部門の生産ダウンのため）。●鉱山労働者「連帯」、政府の賃金政策を不満として２時間の警告スト。

11月６日　コズウォフスキ内相、ミレフスキ元内相らに関する調査は継続されると述べる。●ドイツの通信社ＤＰＡによれば、ポーランドとドイツはポーランド国内のドイツ人少数民族の保護に関して大枠合意に至ったという。●失業者100万8000人、失業率7.5%に。

11月７日　鉱山労働者「連帯」全国評議会は、政府が前向きの交渉姿勢を示さないとして20日にストを予告。

11月８日　マゾヴィエツキ首相とコール独首相、現国境を確認する国境条約を11月中にワルシャワで調印することで合意。また、両国関係強化をうたう善隣協力条約を来年１月に締結することに。ポーランド人のドイツ入国に際しては、ビザを免除する方針が示された。●ＯＫＰは新議長にミエチスワフ・ギル（ノヴァフタの「連帯」指導者、下院議員）を選出、新幹部会も選出。前議長Ｂ・ゲレメクは立候補せず。●下院、旧統一労働者党の資産の国有化を賛成167、反対120、棄権32で可決。●イラクに捕らえられていたポーランド人人質238人が解放され出国。　　［訳編：武井摩利］

編集後記

☆注目の大統領選挙は最終的にワレサ「連帯」委員長が圧倒的多数で選出され、その意味では予想通りでした。しかし、そこにいたる過程では予想外の事態の連続だったといってよいでしょう。
☆第１。ティミンスキ現象。政策も経歴も明らかにしない外国帰りの成金が何百万票も集めてしまう不思議さ。第２。そのあおりで、80%を取ると豪語していたワレサが40%にとどまり、マゾヴィエツキに至っては20%に達せず、第１回投票で敗退。第３。鳴り物入りの完全自由選挙にもかかわらず、投票率は第１回＝60%、第２回＝50%という予想外の低さ。第４。旧共産党系候補が151万票、９%を取る健闘ぶり。その他その他。
☆しかし、政治決戦はこれで決着したわけではなく、舞台は来春の国会選挙に移ります。
☆次号は３月初め。よいお年を。1990・12・14　み

ポーランド月報、九九一年一／二月号（通巻、〇六／一〇七号）
［九九一年一月五日発行（毎月一回五日発行）］
［一九八四年二月一〇日第三種郵便物認可］

ユーモア館

発行所・ポーランド資料センター
Center for Polish Research
〒177　東京都練馬区下石神井６—35—７
電話　03—3904—0427　　郵便振替　東京　２－81069
6－35－7　Shimo－Shakujii, Nerima－ku, Tokyo 177 JAPAN
定価５００円・年間定期購読料4600円（送料共）